

三昧神



犀東
居士作



花
ぎ
く
ろ

犀國
東府
新作

東京
文武堂
藏版



花ざくら

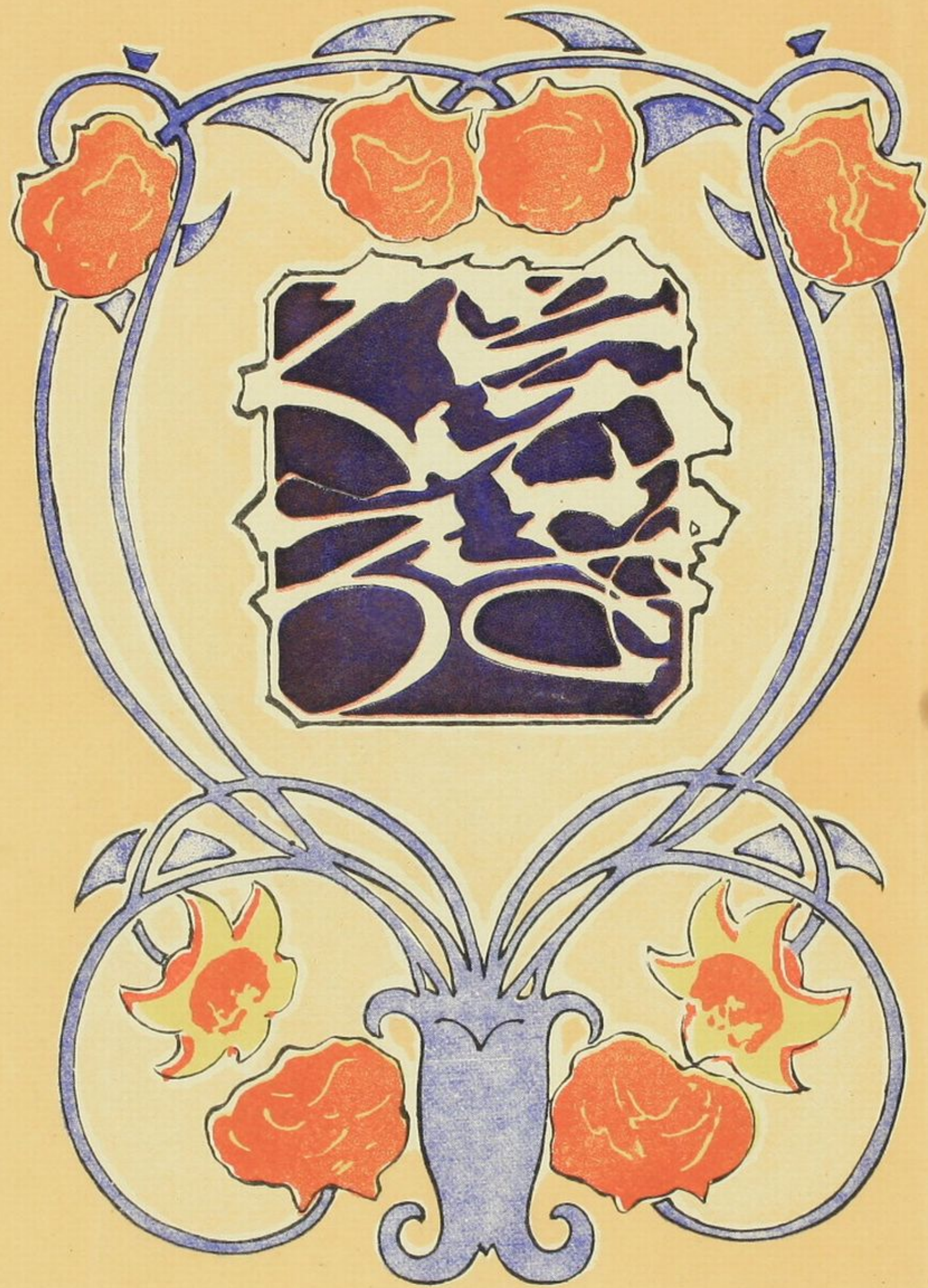


花ざくら

犀國東府新作

東京文武堂藏版





花ざくるる

東京文武堂藏版



國府犀東作

花さくら

國府犀東作

花さくろ

結城素明繪
渡邊審也繪
平福百穂繪

序

犀東國府君の詩文に於ける當世多く其の倫を見ず。若し一藝一門の長を以てすれば世自ら其の撰あらむ。唯詩歌俳諧文章の何たるを問はず體裁和漢に通じ稱謂東西に亘り政治經濟文藝史傳八面玲瓏行く所として可ならざる無き犀東の如きは未だ曾て是れあざる也。夫れ詩文の體たる素と一譬へば米の如し。炊げば則ち飯となり。釀せば則ち酒となる。顧ふに犀東は當世の健兒善く食ひ善く飲み。腹筭常に便々たり。其の酒は則ち詩となり。其の飯は則ち文となり。隨て蓄れば隨て發

し、混々として停止する所を知らず、怡々然として鳥の野に飛び水の溪に流るゝが如し。是れ當世白面の文士、顔に憂色あり、文に悲調あるものと太だ撰を異にする所、犀東の本領亦此に在る乎。頃日新體詩篇一卷を著はし、序を予に徴す。開き見るに、滿載の詩篇、春秋の粉脂を萃め、粲然として人目を射る。或は音韻錯落、亂山雲に聳ゆるが如く、或は餘情依稀、暮笛風に咽ぶが如く、或は豪爽、或は幽婉、或は離奇、或は天矯、讀者をして應接に違あらざらしむ。聞説らく是れ犀東が旬日の作に係ると。嗚呼十日一水、五日一石は古の道のみ。胸に五岳を貯ふれ

ば目に全牛無し。古の所謂萬卷の書を読み、萬里の道を行くもの、犀東の奇才亦是の如きものあるか。録して以な序となす。

明治三十四年秋九月中旬湘南鳴立澤邊に於て

高山林次郎

Den Frieden kann das Wollen nicht bereiten,
Wer Alles will, will sich vor allen mächtig,
Indem er siegt, lehrt er die Andern streiten;
Bedenkend macht er seinen Feind verächtlich;
So Waschen Kraft und List noch allen Seiten,
Der Weltkreis ruht von Ungehovern trüchlich,
Und der Geburten Zahlenlose Plage
Dreht jeden Tag als mit dem jüngsten Tage.
Der Dichters sucht das Schicksal zu entbinden,
Das, wogenhaft und schrecklich ungestaltet,
Might Masz, noch Ziel, noch Richte weisz zu finden
Und brausend webt, zerstört und knirschend waltet,
Da fasst die Kunst in liebenden Entzünden
Der Masse Wust, die ist sogleich entfaltet,
Durch Mitverdient gemein samen Erregens,
Gesang und Rede, stautigen Bewegens."

— Goethe.

序

犀東は韻文家を以て自から任ずる者に非ず。偶然
思ひ立ちて、世に刊行せられたる、あらゆる新體詩
集を讀みて、慨歎して曰く、今の新體詩なる者は、
いづれも纖弱にして、豪爽ならず。悲哀の音ありて、
雄大の想あらず。要するに、婦女子の態也。將來世
界に雄飛すべき日本國民の歌とするに足らずと。是
に於て、更に思ひ立ちて、門をとち、客を謝し、食
を絶ち、夜も寝ず、兀坐頤を支へて苦吟すると十日。
かくて自から數十篇を作り出せり。花ざくる一篇

即ち是也。其精力既に人に絶す。其奇才實に端倪すべからず。

今の新體詩人中にて、藤村は辭と情とよく調和して、婉美にして流麗也。草花咲き滿てる秋の野に、鈴虫の鳴くが如し。泣菫は更に哀切なる者。破れたる芭蕉葉に秋雨の灑ぐが如し。雨江はやさしくして切也。美女の怨言を吐くが如し。羽衣は綺麗にしてのびやか也。貴女の淡粧せるが如し。晚翠は一種沈痛の調あり。惜むらくは單調に失す。急湍の水の如し。犀東の新體詩は則ち何如。

犀東意氣豪に、筆力雄大也。涙を歌はず、戀愛を歌はず。奔馬の筆を以て、鬱勃せる胸中の磊塊を吐露す。聳るて信越の連山簇立磅礴して天を刺すが如く、亂れて日本海の怒濤澎湃として親不知の斷崖を嚙むが如し。思ふに犀東は加州の産、白山立山を仰ぎ、日本海に俯し、詞藻自から自然の景象と融化せしもの乎。圓熟を缺き、餘情を缺き、聲調を缺き、缺ぐ所多れども、詞意共に雄健瑰奇、亦新體詩壇の一觀たらずんばならず。花ざくる一たび出で、新體詩壇爲に寂莫ならざるを覺ゆる也。

然れどもこれ犀東の餘技のみ。犀東は今の文壇の奇才、政治を論じ、文學を説き、歴史を談じ、漢詩を作つては優に其堂に上り、俳句、短歌皆一體を成す。何ぞ其多能なるや。多能はもと喜ぶべき事にあらねども、犀東が手腕の大、いづくに往くとして可ならざるなきを見て、唯驚歎するの外なし。われは今花ざくろを讀みて、新體詩壇の爲めに、異彩を添へたるを賀すると共に、顧みて自から耻ぢずんばあらず。余が數年間の作、犀東が十日間の作の多きに如かず。而かも筆力氣魄、隻に下れり。走り僵るゝ

に地なし。退いて硯を碎かむ哉。

明治三十四の秋

桂濱月下漁郎

世に秀いずる詩の調べ。
寃に誘はれて、句に頼む。
蜀樓の險、峽江の危。
雲路一月、超えつべし。
天に昇ぼるは、難からし。
會心の句を得る難し。

邯鄲の歩、學ばんか。

楊妃の眉を、畫くとも。

醜き姿、如何にせん。

獨り歌ひて、獨り行く。

韓盧塊逐ひ走る。

班ら足跡、筆の跡。(さいとう)

自序

予幼にして漢詩を好み、樸學の餘暇、彫心鏤肝、拮据捶練、往々にして二三晝夜、煩悶寢食を廢す。積む所亦甚だ饒し。而かも一の意に滿つるなし。常に謂へらく、新時代の詩想を發揮するには、必らず新詩形に待たざる可らずと西詩を讀むに及んで、此必要を覺ゆると益切なりき。和歌を學ぶ。然れども未だ以て新時代の思想を表彰するに足らず。俳句を學ぶ。是れ亦未だ大に新思想を歌

ふに足らず。是に於て乎、一たび新體詩を試みんと念、
久しく禁ずる能はざりき。唯夫れ政論時論の餘暇、聊か
楚宮の細腰を學ぶに過ぎざるが爲め、僅かに試み、輒は
ち中途にして輟め、此意を達するの時期を得ざりき。

新體詩なる名稱如何は、予が問ふ所に非ず。唯新思想
を歌ふに、最も適恰なる詩形を擇はゞ、即ち可也。萬葉は
當年の新體詩也。古詩樂府亦然り。予が試みし所の新體
詩なりや否やは、予關せず。

夙に謂へらく、我邦の新時代は、東洋西洋兩思想集流
滙合の時期也。是れ詩に於ても、東西西洋の思想を采擷
して、始めて新時代を代表し得べき所也と。方今詩を以
て鳴る者、彬々として其れ饒し。然れども國字漢字の調
和未だ完からず。往々にして字句の生硬を免れず。予今
詩集を得たり。是れ必しも新思想を歌ひしに非ず、又必
しも字句に於て、無瑕を得たりといふに非らず。推敲二
三晝夜、或は旬日、苦心の作亦之れなきに非ずと雖とも、

要するに瓦礫堆朶、雜然として篇を累ぬ。抹殺するに忍
びざりしは聊か苦心の存すれば也。

辛丑夏七月下浣

犀東居士識

新體詩集 花柘榴目次

菊水川〔押韻〕	一	頁
天馬の歌	一〇	
海王烈〔押韻〕	一七	
俠客行	二〇	
君馬黃	二五	
幽澗泉	二八	
湘君怨	三二	
王昭君	三五	
金十字	五〇	
桂冠	六一	

花水幻	六五
流鞠歌 <small>（實景即吟）</small>	六八
山燒	七二
櫻鍛冶	七五
芳春曲	七八
舞子舟	八〇
牡丹殿	八二
濕上吟 <small>（押韻）</small>	八三
野の夕暮	八八
江上の虹 <small>（押韻）</small>	九三
風の江 <small>（三節同韻）</small>	九六
江の曙 <small>（押韻）</small>	九八
小庭 <small>（押韻）</small>	一〇二

蜀山賦 <small>（送島田曉舟之四川）</small>	一〇五
山水問答	一〇九
水雞	一一一
郭公	一一二
磯の雨	一一五
青嵐	一一六
雲の峯	一一八
岩清水	一一九
短夜	一二一
瀧殿	一二三
蓮花舟	一二五
富士詣	一二六
涼み船	一二八

炎天	一九〇
蚊帳の月	一三三
明星	一三五
夜の神聖	一三七
午睡	一四六
梁父の吟	一四九
大田菊洲を憶ふ	一五五
長男爵を悼む歌并に短歌	一五七
大橋乙羽君を挽す	一五九
金曜の凝血	一六九
戸隠探検隊を送る	一七二
童子の歸省を送る	一七五
白山の絶頂〔押韻〕	一七八

怒濤の岩〔押韻〕	一九八
越の立山〔押韻〕	二一一
藻の花集	二三一
郊外の吟十八首	

目次終



新體詩集
花 柘 榴

菊 水 川 (押韻)

國 府 犀 東 作

天に詩の神、照鑒す、
地に詩の國を、呵護せや、
我が故里の、清き川、
菊の車を流すとや。

文星連なる、雲井より、
七つの星の、一つ墮ち、

For busy thoughts the stream flowed on
In foamy agitation;
And slept in many a crystal pool
For quiet contemplation;
No public and on private care
The freeborn mind enthralling,
We made a day of happy hours,
Our happy days recalling.
Brisk Youth appeared, the Morn of-youth,
With freaks of graceful folly,—
Life's temperate Noon, her sober Eve
Her Night not melancholy,
Past, present, future, all appeared
In harmony united,
Like guests that meet, and some from far,
By cordial love invited.
"Yarrow Revisited:"
Wordsworth's.



菊に滴る、玉となり、
地に透き光る、誰が形。

生ぶ衣縫ひし、黄木綿、
晒らし染めにし、其色ぞ、
菊の天より、吸ひ溜めし、
蔬の液をば、浸すとぞ。

百々瀬に水は、石をせき、
渦なす流れ、瀧となり、
鈞天樂の、谷深み、
無絃の琴は、微かなり。



蒲公英董、手に摘みし、
古りにし岸の、さゝれ石、
川清ければ、苔蒸さず、
水晶の如く、底白し。

野山十里を貫きて、
城郭遶ぐる、玉の帯、
春の大鱗、夏の鮎、
銀鱗跳ぬる、幾千尾。

百瀑かゝる、谷遠く、
大輪の花房、群れ亂る、
鬱金黄なる、玉の露、



尚ほ滴りて、瀬に流る。

布を晒せば、絹となり、
酒を造れば、香ばし、
其水飲めば、病なく、
人の壽命を、延つべし。

冽なる流れ、甘き水、
掬びつ飲みつ、浴みしつ、
茲に魚釣り、田に漑ぎ、
其稻炊ぎ、我れ食みつ。

肉も血も此の、水を沁み、

露の清きを、みなぎらす、
骨も膚も、汚れなく、
瀬に鍛はれて、玉をなす。

詩神は清き、身にやどる、
腋に車、香を浮かせ、
胸に涵ふる、黄の色、
是れ詩の神や、護りませ。

神の囁き、天つ歌、
搖籃以來、聞く久し、
日を指し金の、車とす、
愚にして我に、詩才なし。



耽り初めたる、句の調べ、
翡翠の羽の、たゞ軽く、
石千鈞を、あげんには、
力のなくて、地にすだく。

涼しき心、火にもえて、
脈に血汐の、走しる音、
沙漠にあさる、寶石、
覓めね駱駝の、足の跡。

『戀に狂ふか、何故に、
さは惱むや』と、嘲られ、
魔神の口に、咀はれて、

迷樓に惑ふ、獨り我れ。

眞珠を采れる、夷人、
日に獲る顆の、數知らず。
詩に苦しめる、日もすがら、
瓦磨けど、艶あらず。

『筆折らばやな』、『暫し待て』、
光なき石、くだき見よ。
菊の車や、泡の痕、
缺目に綾の、妙へなるよ。

菊の玉葺、其車、



硯薫じて、香ばしも。
此瀬の流れ、せめて今、
我が故里の、片見かも。

鐵のからくり、山うがち、
地底に銀の、石孕み、
鉛の汁は、溢れ注ぎ、
菊水濁る、我が恨。

メルトン式の、水車、
轟きめぐる、野に今や、
電気もえ立つ、菊の水、
車流るや、流れずや。

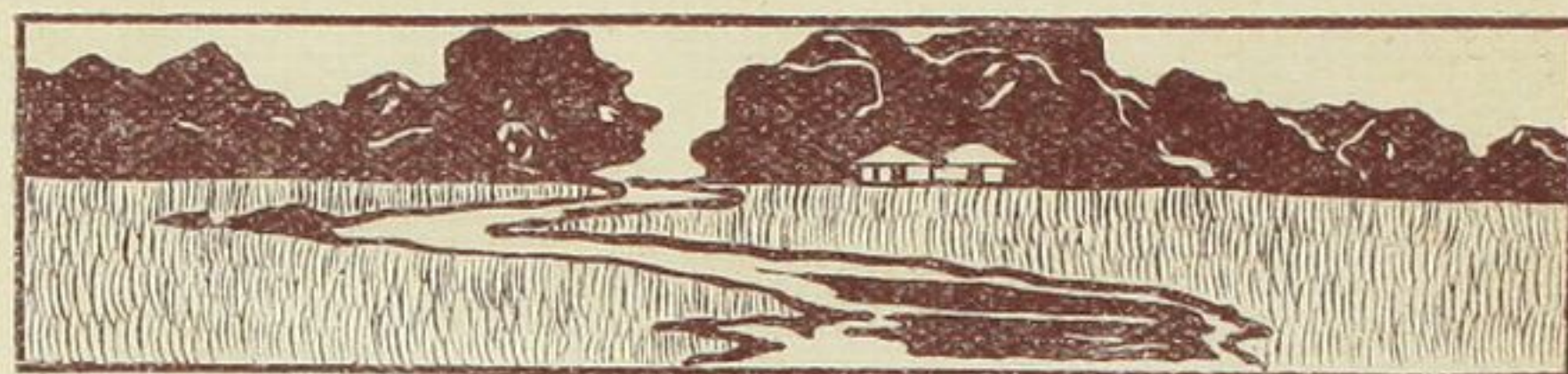


〔我故里の野を流るゝ犀川は、一の名を菊水川と呼び、金澤城の西南を流る。予久しく外に在り、故郷を思ふ毎に、此川は偲ばれぬ。今江上に住みて、そゞる此川の戀しければ、はしなく此歌をものしけり〕

Und horch ! da sprudelt es silberhell,
Ganz nahe, wie rieselndes Rauschen,

Und stille hält er, zu lauschen,
Und sich', aus dem Felsen, geschwätzig, schnell,
Springt murmelnd hervor ein lebendiger Quell,

* * * * *
Und die Angst beflügelt den eilenden Fuss,
Ihn jagen der Sorgen Qualen ;
Da schimmern in Abendrot's strahlen
Von ferne die Zinnen von Syrakus. (Schiller)

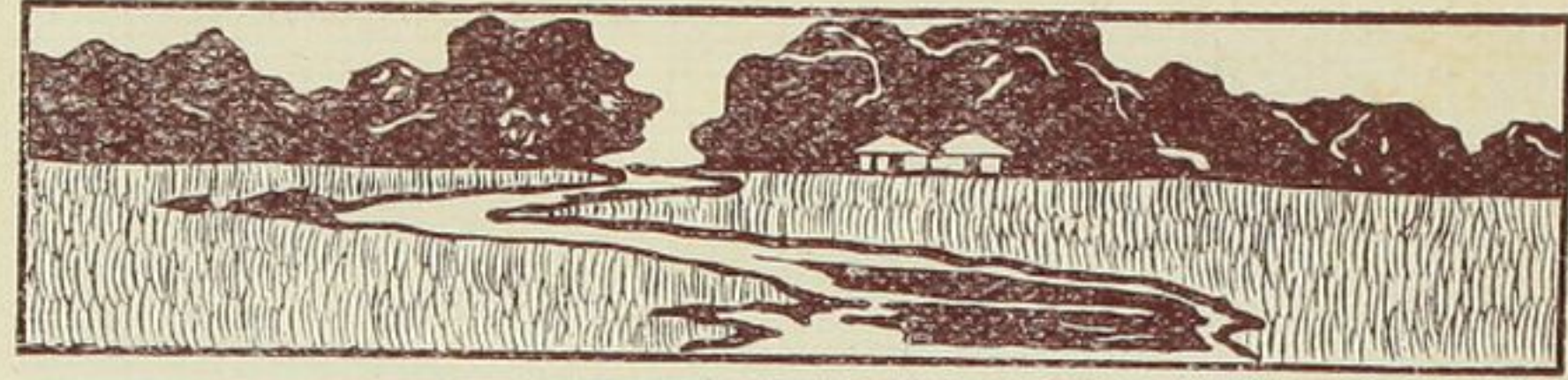


天馬の歌

天馬は來る、天の上、
潔き光を、凝り成し、
星の王なる、月の精、
散じて房子の星となり、
黄金の總身に絡ひ、
天池の波に、浴みして、
鬣振ふ、天津風、
銀河を鼓らし、影うつし、
大宛國に、落下して、
沙漠に立ちて、嘶けり。



漢の天子は、歌ふらく、
『天馬は徠る、西の極、
萬里を經りて、徳に歸し、
流沙を涉り、四夷服す』
天を行くには、龍に乗り、
地を行く茲に、天馬あり。
帝の厩戸、朱の柱、
金絲の綱に繫かれつ、
繡の鞍被、背を掩ひ、
日に百石の、豆を咬む。
骨突つ立てる、其脊、
瑠璃珊瑚を、編み成し、



錦の鞍を、置き給ひ、
紫金の鐙、金轡、
玉鞭一たび、風に撃つ、
花形斑らの、逆毛立て、
四つの蹄に、風を入れ、
日に行く千里、疲色なく、
地を蹴り電火、閃裂す。

都大路に、警蹕し、
君は鑾車を、馳せまさず。
王郎造父、用やある、
天馬は車駕の、飾とや。
さらば驚馬にて、足るべきを、



大宛二馬天廐所育詔錫張蔡公

元 郝 經

二馬飄飄萬里來。玉花蕭颯上金臺。風生兩耳雲霄近。

電掣雙瞳日月開。渥水虎文連殺氣。大宛龍種絕氛埃。

將軍正欲成勳業。看汝驍騰展驥才。

走しらば君は、安からじ、
馳せざば趾に、肉生へん、
寧しろ飛將に、鞭を受け、
天山南路、越えまほし、
牧草千里、肥えしとや。

全身血汗の泡を吹き、
蹄鐵黒き、蹄立て、
沙漠の天に、跳ね躍り、
崑崙山を、はや超えて、
月氏の原野を横絶し、
眞一文字に、猛り馳す、
是れ大宛の、同種かも、



同じく墜ちし、星の精、
息荒ら巻きて、長嘶す、
ちぎれ雲とぶ、大荒野。

何地馳せ行く、此天馬、
日の入る西を、睨め駈けつ、
千里に面を、振りもせず、
海の限りに、跳ね返へり、
北斗星を、振り向きつ、
躍りて、竟に、地を離れ、
尾を彗星の、如く引き、
虚空を高く、飛ぶ疾やし。
天馬は茲に、天に行く、



再び地にな、墜ちて來そ。

漢家の天子、老いませり、
栢梁臺の、承露盤、
仙人不死の、藥を鍊り、
羽軍の獵に、強弩なく、
樓蘭王を、斬りし太刀、
使者太秦馬羅に、樹てし旗、
庫に錆びつき、箭は朽ちぬ。
天馬もかくて、老ゆべきか、
漢家に事ふ、幸なさよ、
狂ひて轡、噛み切らん。



詩人李白は、歌ふらく、
 『請ふ贖ひて、君行きて、
 穆天子にぞ、獻じませ、
 瑤池の上に、影うつし、
 猶ほ舞ひ行くに、堪えもせん。』
 狂はざらめや、小山河、
 是れ漢皇の、天下とや、
 黄金造りの、大轡、
 狂は、砕け、馳せ戻り、
 再び星の、精たらん。

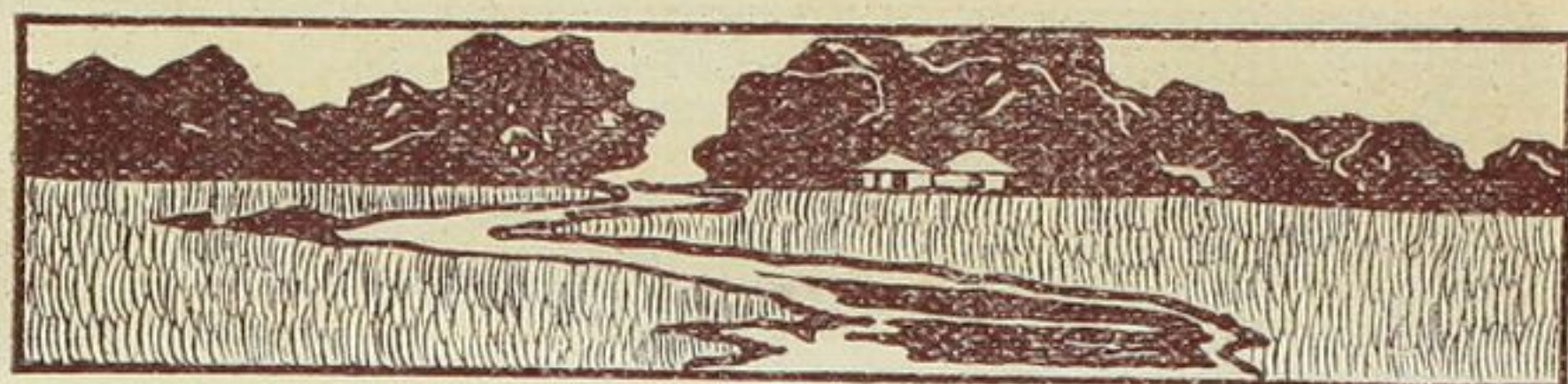
胡馬大宛名。鋒稜瘦骨成。竹批雙耳峻。風入四蹄輕。所向無空
 澗。真堪托死生。驍騰有如此。萬里可橫行。

杜甫房兵曹胡馬詩



海王烈 (押韻)

怒濤逆卷き、海荒らし、
 箭よりも迅き帆、風孕み、
 舵樓に斧を、掛けし下、
 海魔に彎ける、梓弓、
 目に冷笑の、凄まじく、
 舷頭波臣を、叱咤して、
 海王の髪、天を衝く、
 獸皮の冠、跳ね落ちて。
 王は燧を、手にうちて、
 積む柴束に、火をかけり、



火は帆柱に、蔓衍し、
綱先づ燃えて、火花散り、
帆に紅の、纈裂け、
錦の褸襪、吹き煽ほる。
風いや烈し、火は猛し、
舳艫俱に、炎え上がる。
海乍ちに、大火出で、
雲を焦がして、天赤く、
波熾く、怒號して、
王座に近く、渦を卷く。
はや戰袍の裾を焼き、
佩刀落とす、帶の腹、



王は動かさず、舟は馳せ、
沖へ乗り出す、和田の原。
満船炎えて、王見えぬ、
火のみ閃めく、波の上、
『焚ゆる肉體、戰死せし、
勇士の骸と、享け給へ』。
神に捧げて、身を焼きし、
ノルマン王の、勇ましや、
身は戰場に、死せずとも、
魂をば神の、棄つべきや。

Tiefe Stille herrscht im Wasser,
Ohne Regung ruht das Meer,



Und bekümmert sieht der Schiffer
Glatte Fläche rings umher
Keine Luft, von keiner Seite!
Todesstille, furchterlich!
In der ungeheuren Weite
Reget keine Welle sich. (Goethe)

俠客行

髻結ぶ、絲白し、
緒占に弾く、髪立ちて、
電如き、目の光、
金燭爛たる、大廣間。
腰に佩きたる、長劔ながつるぎ、



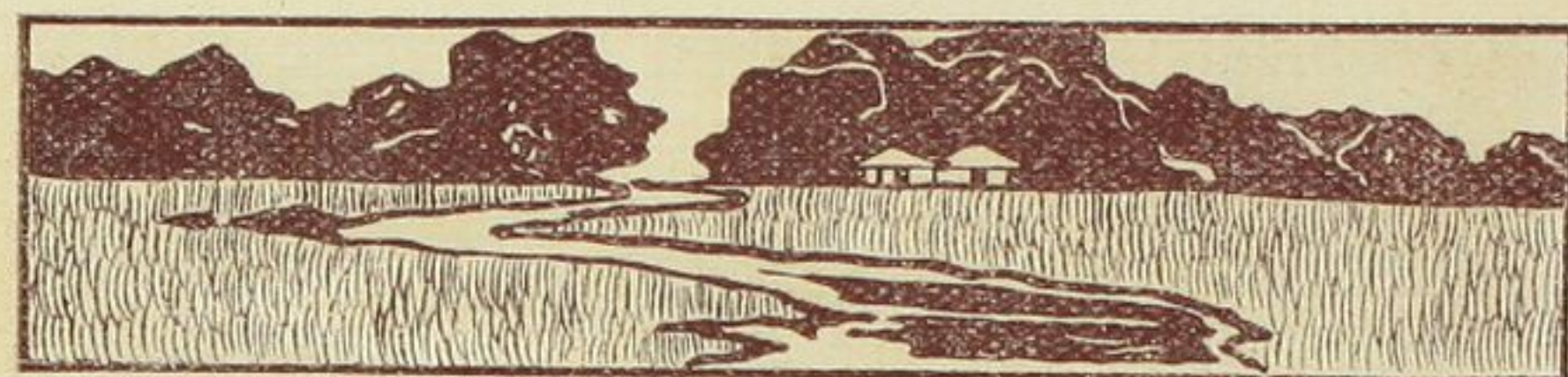
十歩に一人、斬り殺し、
千里に一の敵やある、
衣を拂へば、腥し。
客三千の、並ぶ席、
誰れ上客ぞ、年七十、
守門の衛士、一老爺、
満座の客は、舌を巻く。
珠の車に、迎ひ來し、
客を彫める、牀に引き、
大杯捧げ、跪く、
魏國の公子、信陵君。



虎狼の秦氏、趙を撃ち、
夜長平の、陥し坑、
屠殺の悪魔、血にたけり、
邯鄲城は、はや落ちん。
魏の援軍は、野を蔽ひ、
鄴の都に、陣すれど、
魏王は秦に、嚇されて、
將軍進み、戦はず。
虎の割符は、宮深く、
秘めて在りとや、偷み得ん。
姫の讐人、刺して請ふ、



姫感激し、符を授く。
鄴の陣所に、駈けて入る、
上客朱亥、袖の中、
鐵錐重さ、四十斤、
將軍頭、撃ち摧く。
軍を奪ひて、號令し、
拍ち出す兵鼓は、野に震ふ、
秦人旗を、顧みて、
怖れて圍、解き去りぬ。
『秦を帝とし、尊びて、



之れに事へ』と、誰れか言ふ、
彼れが玉冕、碎かばや、
我が鐵錐の、敵ならじ。

頭一たび、縦てに振り、
秦氏の山河、裂けしとや、
守門の衛士、屠者朱亥、
死して俠骨、香ばし。

陰符を讀みし、窮書生、
縦横術は、拙なりき。
秦氏の徳を、石に鐫り、
朕と言はせし、何の迂ぞ。

驪馬宰青絲。閭里爭耀馳。朝游吳姬肆。暮入屠沽兒。袖中挾
匕首。跨下黃金鎧。然諾杯酒間。泰山心不移。東市殺怨吏。西
市仆仇尸。裂眦白日變。英風拉如摧。突過銅龍門。電影忽如
遺。司隸徒歛手。行人莫敢窺。橫行三輔間。法令不得施。壯義
冠千古。雄聲流四垂。 徐禎卿結客少年場行

君馬黃

君馬黃なり、我れ玄し、
是れ地の色か、天の色、
剖判せざる、そのかみに、
君と我れとの、けぢめなし。
身こそ異なれ、此心、



鏡に花の影蘸し、
明月水に、痕ぞ澄む、
清きは君と、我れとのみ。

梨地の鞍に、玉の鞭、
都大路を、駒なめて、
花の巷に、並び行く、
美人樓下の、春の水。

鞘の蒔繪は、花紅葉、
金具は金の、波千鳥、
一は春雨、つばくらめ、
其太刀佩きて、二人行く。

君下垂の、練りし絹、
色絲縫ひし、秋の草、
韓輪に四季の、花盡くし、
裾染め分けし、我が衣。

朝に集ふ、桃の園、
句を曲水に、鬪はし、
夕に上ぼる、月の殿、
鳳尾の簫を、吹き調ぶ。

毬に戯むる、巖の陰、
獅子も心の、あくがれて、



榕樹の林、鳴り鏞、
創負ふことの、なからんや。

瑪瑙の杯、琥珀盤、
美人の前に、誓ひけり。
『危急は共に、身を捧げ、
玉と碎けよ、花と散れ。』

君馬黃我馬白。馬色雖不同。人心本無隔。共作遊冶盤。雙行
洛陽陌。長劍既照耀。高冠何絕赫。各有千金裘。俱爲五侯客。
猛虎落陷穽。壯士時風厄。相知在急難。獨好亦何益。

李白君馬黃

幽澗泉

石の上掃ふ、十二絃、
琴彈ずれば、谷は鳴り、
瀧つ瀬、下に、合奏し、
同じ調べの、妙なりや。

高山流水、是れ知音、
伯牙は絃を、断ちしとや。
無絃の琴を、掻き鳴らす、
天の一方、美人泣く。

嶺の嵐か、松風か、
天津女神の、調べにや、
驚別鶴の、曲かすか、





天にも戀の、あるものを。

客に恨を、抱くあり、
猿の啼きて、落葉して、
尋ぬる人の、迹を得ず、
調べを聞いて、慟哭す。

惱みし客は、石を打ち、
身も世も忘れ、目を閉ぢぬ。
大絃、水は、石を裂く、
小絃、松の、囁きか。

泣くはいづこの、姫ならん、

訴へ語る、誰が妻ぞ、
襟を正せる、客の胸、
涙千行、落ち絶えず。

何れの世より、此調べ、
誰れ人間に、傳へしか、
狂ひし客は、惱亂し、
泣き死にせんは、いたはし。

幽澗泉の、曲とかや、
林に鶉の、伴れを呼び、
妻戀ふ鹿の、聲淋し、
月に碎くる、谷の水。



山中人兮芳杜若。飲石泉兮蔭松柏。君思我兮然疑作。雷填
 填兮雷冥冥。援啾啾兮狻夜鳴。風颯颯兮木蕭蕭。思公子兮
 徒離憂。 屈平 山 兔

湘君怨

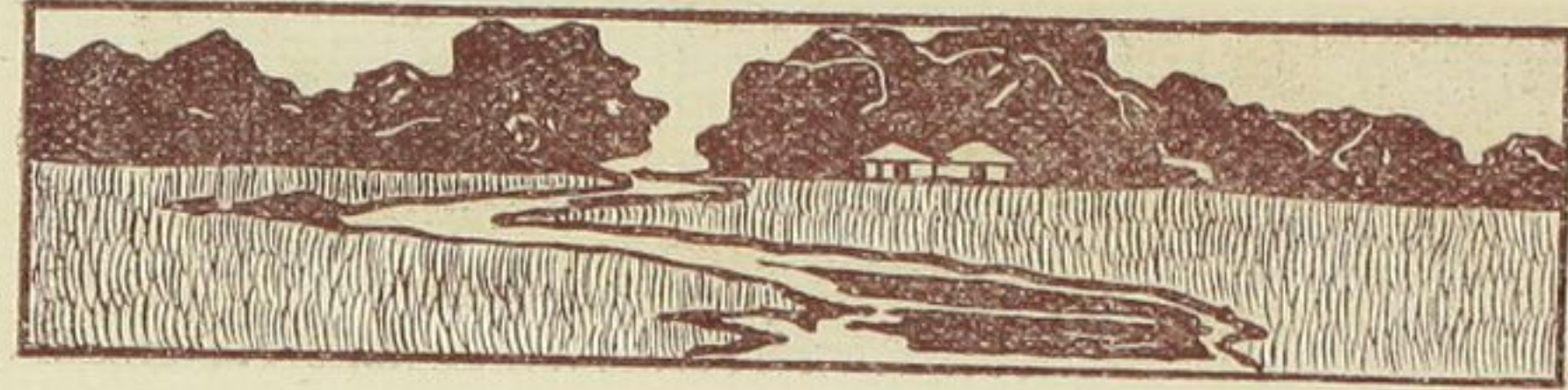
風嫋嫋の、秋を吹き、
 波洞庭に、鬢を織り、
 木は蕭蕭の、葉を落し、
 雲に猩猩の、狂ふとぞ。
 水瀟湘の、江に浅く、
 蘋浮きて、蘭秀で、
 渚に草の、香はしく、

尾花の露に、玉は散る。

蒼梧の野にぞ、君逝きし、
 九疑の山は、雨醸もす、
 帝の二た姫、溺れ死し、
 沅湘長く、怨あり。

佳人の召べば、我れ往きて、
 水の真中に、住まばやな、
 荷葉を屋根に、藻の戸帳、
 芙蓉の柱、蘿つたの苔。

蓮はちすの花を、舟となし、



桂の枝を、權に漕ぎ、
佳人の宮居、音づれて、
盡きぬ怨を、慰めん。

菖蒲を綴る、我が衣、
杜若を佩きて、帯に巻き、
波踏み分けて、我れ行かん、
湘君二人、居ます宮。

帝の二た姫、湖の央なかつ、
緑の雲に、泣き盡くし、
波間に遠く、見え失せて、
蘆の葉そよぐ、音のみぞ。



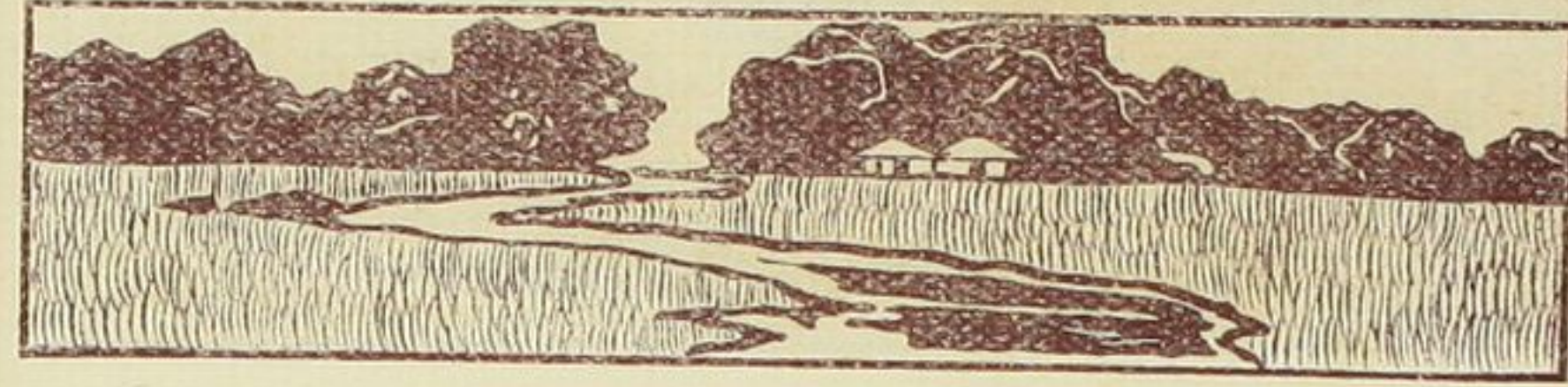
蒼梧の山は、崩るとも、
湘浦の水は、あするとも、
斑らの竹に、恨あり、
涙痕消えなん、時あらし。

九疑嶺兮竝迎。靈之來兮如雲。捐余袂兮江中。遺余褋兮醴浦。峴汀洲兮杜若。將以遺兮遠者。時不可兮驟得。聊逍遙兮容與。
屈平湘夫人

王昭君

漢宮

未央の宮を、彩どりて、



霞棚引く、七重八重、
雲井に、栢梁臺は立ち、
蜚廉の神は、天に舞ふ。

懸棟飛閣、五歩十歩、
輦道複道、空に架し、
虹は碧瓦の上を曳く、
誰れ迷宮の、奥を知る。

宮媛

花の顔、雲の鬢、
春殿閉ざす、三千姫、

化粧の膏は、溝に充ち、
脂粉の川を、なせしとや。

艶ある花に、愧ぢ妬み、
鏡を啓く、玉の匳、
蛾眉を書ける、刷毛の痕、
召びます夜をば、數へ待つ。

四寶宮

七寶の臥牀、繡几帳、
玉座に眞近く、美を誇り、
雜寶案を、前に置く、



孔雀の蓆敷く上に。

寶の屏風、立て廻はし、
列寶帳を掛け並べ、
四つの寶の、宮といふ、
侍べらん姫を、誰とせん。

繪像

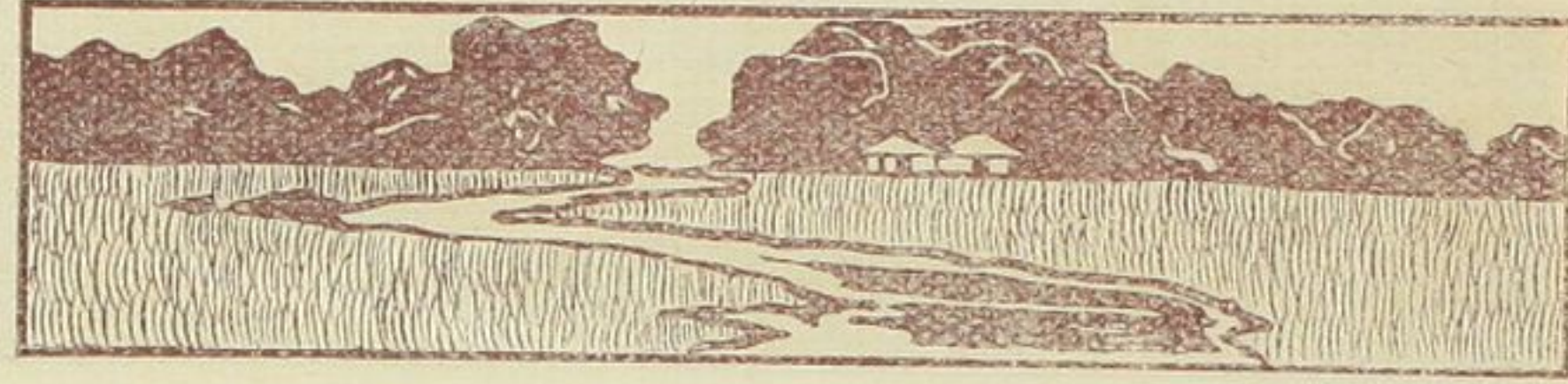
『姫三千の、繪の形、
典侍を擇ぶ』命せあり、
繪像を造くる、其價、
十萬金と、申すあり。



黄金轉化の、力とや、
腐唇に色づく、桃の花、
歴新たに、生へしあり、
繪像にやつる、宮仕ひ。

明星

鬢も理めず、懶しとて、
紅筆取らず、つくらはず、
されど蓮の、香を含み、
秋水出でし、艶の色。



『繪人の巧み、借らずとも、
夕づゝよりも、淨き我れ、
眞の姿を、見そなはせ、
繪圖醜みにくは、かゝるとも。』

純金

日は蔽はれて、萎ぼむ花、
海棠雨の、いや暗らし。
選みに泄れし、沙の底、
純金光り、透きとほる。
梟は玉の籠に棲み、



鶴羽衣の、恨あり、
美人哭して、君きみ知らず、
ほつれ毛撫づる、うとましき。

胡人配

匈奴の使者は、入觀し、
『内姫を賜へ』と、上奏す。
帝は親ら、繪を案じ、
醜みにき一人、選りましぬ。

『沙漠萬里に、とつぎ行け、』
勅命下る、内の宮。



猛き美人は、ためらはず、
胡地に行くをば、諾ひぬ。

驚愕

錦の幔を、打ち廻はし、
朱雀の幟、龍の旗、
御階の前に、跪づき、
匈奴の使者は、命を待つ。

是れ蓬萊の、織女かも、
是れ藐射姑の、神姫かも、
涼しき目には、決意あり、

帝の愕き、いかばかり。

嗟臍

帝は悔しく、思ほせど、
『國の信義は、重からめ、
一たび行くと、諾ひし、
舌乾かぬを、奈何にせん』

帝の勧めは、切なれど、
美人は聞かず、『此身こそ、
毛よりも軽し、國重し、』
繪圖に誤り、ありしとも。



烈女

『繪に偽りの、ありし』とて、
 帝の赫怒は、雷ならず、
 繪人五人は、棄市せらる、
 されど美人は、意を枉げず。

かよわき腕、馬の脊に、
 萬里都の、暇乞ひ、
 黄河は天より、奔流し、
 胡地に峙立つ、五臺嶺。



漠北

祈連の山は、帯をなし、
 沙漠の天に、連りて、
 績ぐや霧の色黄也、
 燕支はいづこ、雲迷ふ。

駱駝の遊ぶ、大荒野、
 穹窿形の幕の廬、
 千草の末に見るも罕れ、
 我が居寝るべき、宮是れか。

琵琶

THE MAID OF NEIDPATH.

Yet keenest powers to see and hear
 Seem'd in her frame residing ;
 Before the watch-dog prick'd his ear
 She heard her lover's riding ;
 Ere scarce a distant form was Kenn'd
 She knew and waved to greet him,
 And o'er the battlement did bend
 As on the wing to meet him.
 He came—he pass'd—an heedless gaze
 As o'er some stranger glancing ;
 Her welcome, spoke in faltering phrase,
 Lost in his courser's prancing—
 The castle-arch, whose hollow tone
 Returns each whisper spoken,
 Could scarcely catch the feeble moan
 Which told her heart was broken.

— Sir W. Scott. —



一たび去らば、胡地の妻、
都にいつか、還るべき、
力なき手に、撥を取る、
馬上の琵琶に、神泣かん。

東の海に、出づる月、
甘泉殿の、屋根の棟、
空幾たゞび、照らすとも、
明妃は還らず、玉門關。

雪花

蓆の如き、雲の片、
銀の花とぶ、燕支山、

雪より出でて、雪に入る、
日に漢代の、光なし。

雪輪の狂ふ、大沙漠、
狂ふは姫の、心なり、
琵琶の絲切れ、撥折れぬ、
『凍えて飢えて、我死なん。』

最終

骨立ち疲せし、病む姿、
やつれ顛き、鞍に伏す。
若し漢帝の、見給はゞ、



哀しみ狂ひ、失せまさん。

星懐まじき、目の光、

『終りの眸、開き見ん、

都はいづこ、南を』と、

問へど胡人は、語を解けせず。

胡沙

生きて蘭麝の、殿に居り、

死して沙漠の、草枕、

伽羅の香沙に、消え失せて、

盡きせぬ恨、胡地の月。

駱駝を呼ぶか、蘆の笛、
吹くは匈奴の、牧の子か、
悲しき歴史、語るべき、
胡沙に蓮歩の、跡もなし。

青塚

天に連なる、大沙場、

白草のみぞ、敷き生ふる。

明妃の塚の、草の色、

などて青くや、萌え出づる。



塞沙に白き霜の跡、
勇士の血には、飽きもせん、
美人の魂を、留めしより、
沙に艶あり、涙あり。

漢家秦地月。流影照明妃。一上玉關道。天涯去不歸。漢月還
從東海出。明妃西嫁無來日。燕支長寒雪作花。蛾眉憔悴沒
胡沙。生乏黃金枉圖畫。死留青塚使人嗟。
昭君拂玉鞍。上馬啼紅頰。今日漢宮人。明朝胡地妾。

李白昭君怨

金十字

金十字架を、捧げ持つ、

片方の手には、抜く劔、
『悪魔は東の、空にあり、
平和の爲めに、伐つ』とかや。

血は杵浮かす、地の限り、
殺氣に日影、光なく、
罪なき無智の、民ぞ泣く、
屠所の羊か、釜の魚。

鐵の器械の、運轉し、
電氣の流れ、たばしりて、
觸れなば石をも、裂きつべし。
世に文明の、敵あらし。



愚といふ人の、冷たさよ、
悪魔もかくは、酷ならず。
なれ幼なく、力なく、
人の迫害、もし受けば、
いかに無情を、怨むべき、
怨鬼は絶えず、神は泣く。
『子を愛で育て、導けよ』
是れなが神の、訓へなり。
なれそれを破ぶり、違反しぬ、
冥府の責を、恐れずや。



寶の石を、切る鋼、
金銀熔かす、焙鑛礪、
山に香木、刃を受け、
遺利ある庫は、あはかるゝ。
銃を放つて、森を行く、
鳥騒がずで、あるべきや、
静謐破ぶる、そは誰ぞ、
鳥の罪とは、いふべきや。
赤子を嚇し、欺きて、
坑に落して、それを笑ひ、



荆棘生ふる山の道、
嚮導なくて、進み得ね、
權をも知らず、柁知らず、
など荒海に漕ぐべきぞ。

山の男に、柁教へ、

海士に山路を、説き聞かせ、

かれ知らざるを、導けや、

是れ先覺の、道ならめ。

『火薬は天の、電か、』

なれ其無智を、冷笑し、

ろが持つ毛皮、珍らしく、

なれ奪はんと、欺きし。

玳瑁孔雀、なが飾り、

無智なる民の、賜物ぞ、

なれが裝飾に、捧げゝる、

好意の民を、など惡む。

神人間を、造ります、

時黄白の色、あらず、

野蠻未開と、忌み嫌ふ、

祖先はいかに、生きしとや。

陸を異にし、代を隔て、



なれと彼れとの、別あれど、
なれも一たび、無智なりき、
同胞をなどて、敵といふ。

『文明人の、妨礙物、

未開はなれの、惡魔』とは、
なれが祖先の、侮辱なり、
なれの歴史を、顧みよ。

好しそを指して、敵とせよ、

『敵を愛せ』と、神はいふ。

今殘酷と、殺伐と、

世を虐ぐる、いとはしや。



砲臺飾る、『クルツブ』砲、

磨ける劔、林なし、

鐵馬嘶く、旗の風、

『平和の神』は、哭します。

人の領地に、鐵を敷き、

民を使役し、山を堀り、

武力の下に、服せずば、

『秩序の敵』と、いふとかや。

黒龍江上、人を斬る、

草の如きは、何咎ぞ、



天津城外、無辜の婦女、
合淫何の、亡状ぞ。

なれが君主等、相圖り、
戦争罷めん、議ありしに、
悪魔も泣かん、血の煙、
快と呼びにし、なれ鬼か。

十字架光る、金の色、
そは純金の、箔ならめ、
其十字架は、贋なれや、
虚偽の捧ぐる、金十字。

なれ虚偽こそは、神の敵、
平和を破ぶる、賊の魁、
人の血を見て、笑み躍る、
歴史を汚がす、罪の跡。

我に王者の、劔あり、
正理を鋒に、欄は愛、
世に敵すべき、者もなく、
悪魔悪鬼は、降伏す。

地球轉ぜし、新世紀、
尚ほ神の道、ありとかや。
贋十字架の、此悪魔、



悔悟せしめや、我が前に。

血の痕残す、前世紀、

其腥き、繪巻物、

産婦の腹を、刺ぐられし、

悲劇を以て、畢りける。

我れ今天に、懃へん、

罪惡深き、我か地球、

神に代はりて、我れ被ひ、

凡べて惡魔を、悔えしめん。

世界の民を、撫で服し、



春の臺うその、下に召び、

天の幸をば、頒け與へ、

共に息はん、とこしへに。

生きとし生きる、神の子等、

萬物所を、もし得ずば、

志願の満つる期あるべき、

神や此世を、みそなはせ。

桂 冠

歴史なき世の、創世紀、

卷戦争に、始まりぬ。



捷利の跡は連続し、
凱歌をうたふ人や聖。

鷲は羽ばたき、虎は咆え、
猛獸毒蛇は、塞がりき。

神人之を撃ち殺し、
住むべき世をば鬪きけり。

無限の苦痛は肉薄し、

無数の迫害取り圍み、

我が周邊に隙き間なし、

誰れ戦ひてそを破ぶる。



地水火風は混戦し、

地球の限を包撃す、

人工精緻を極むとも、

之に比らば玩具のみ。

國強弱の臨戦地、

武装の勁く財多き、

是れに勝ちをば見得べし、

豫見を示めず統計表。

地球を衝きて碎くべき、

『コメット』來る何の日ぞ、

無窮に來り軌道なし、



測量術は測り得ず。

有形無形連衡して、
我を重圍に陥るる、
人の力を試めすべき、
戦闘線は無數也。

なれ迫害に、打ち勝ちて、
攻撃力を摧きませ、
戦ひ続け屈せざる、
是れ力なりなれ神か。
身を戦ひになれ捧げ、

凡て苦痛を服し得ば、
なれは宇宙の戦勝者、
未來永劫に敵あらじ。

花水幻

雲に送られ、山を出づ、
水のうつすか、花の影、
流るゝ水に、心なく、
花に情を、誰か知る。

浅くばせきて、瀬を早み、
深きに淀む、水の勢、



一年一たび、春に逢ひ、
花咲く心、たゞせはし。

青春人の、子を惱め、
脈に血走しり、動氣浮く、
是れ魔の神の、戯れか、
罪を造くらす、春の胸。

文殊師利の、智慧の劍、
煩惱を斬りて、捨つるとや、
好し此劍、なれ揮ひ、
世界の戀を、薙ぎませや。

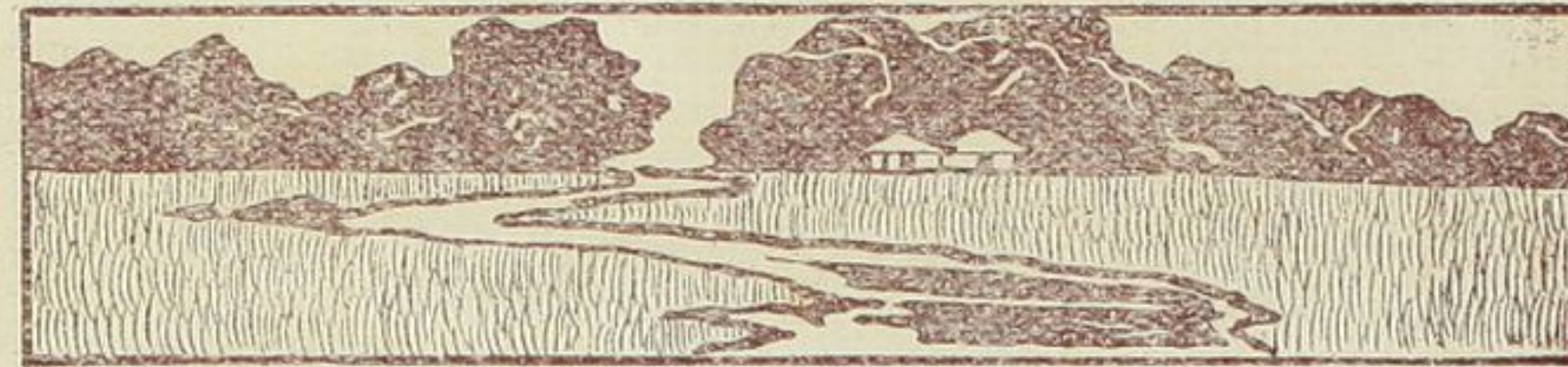
劍閃めく、刃先反り、
電火裂け飛ぶ、隙迅く、
世に人間は、老ひぬべし、
死は夕べをも、待つべきか。

迷は世をば、翻弄し、
凡ての變化、面白ろや。
大觀すれば、春もなく、
花なく獨り、我れのみぞ。

水のみなわや、うたかたの、
花に色あり、香もありき。
浮世を知らず、流れ行く、



落花流水、まがき越し、
 とまらぬ春を、いたみつゝ、
 おもひに耽けり、惱む時、
 浮きつ沈みつ、鞠一つ。
 誰が手すさびの、糸鞠や、
 真紅の糸の、から模様、
 白もて縫ひし、狂ひ獅子、
 戀にはあらぬ、行く末は。
 谷間を出づる、鶯か、
 それかあらぬか、手鞠唄、



波は染らず、花の色。

冷たき石を、嘲るな、
 我れ石となり、世を果てん。
 静けき雲を、君も見よ、
 我れ雲となり、散り行かん。

流 鞠 歌 〔實景即吟〕

都へだてし、わが庵は、
 墨田のほとり、かた里の、
 今は昔の、かたみとや、
 あはれを歌ふ、石ヶ濱。



朝な夕なの、手のすさび、
汝を愛でにし、人や誰れ。

なれはお主しほに、厭いとかれしか、
主は汝をば、見捨てしか、
あなあはれなる、身の果や、
今はいづこに、たゞよはん。

庭下駄軽く、苔を踏み、
眼の下通よふ、真帆片帆、
満ち来る汐に、舵を把り、
船から船へ、語りもて。

われも畫中の、人となり、
興に誘はれ、イめり、
渦く汐の面白く、
不圖眼に見ゆる、鞠一つ。

つくつく見れば、似たるかも、
縫ひし模様の、狂ひ獅子、
汐が持て來し、戯れか、
汐を力にたどりしか。

舞ひつ廻はりつ、主を慕ひ、
水上遠く、上ぼり行く、
優しき汝が、主の君、



さても誰が家の、姫やらん。

山 焼

春山斧の、音たえて、

柚歌谷に、消え失せぬ。

夜は林を、取り巻きて、

貉戸をうつ、山の宿。

折り焚く柴の、爐煙、

納戸にいぶる、荒むしろ、

種を鰥の、渡り行き、

天井の煤は、膝に落つ。

破れ障子に、うつる影、

天突く猛火は、山を焼く、

大鼓うち出す、村の宮、

火風を受けて、凄まじい。

雑木既に、焼き拂ひ、

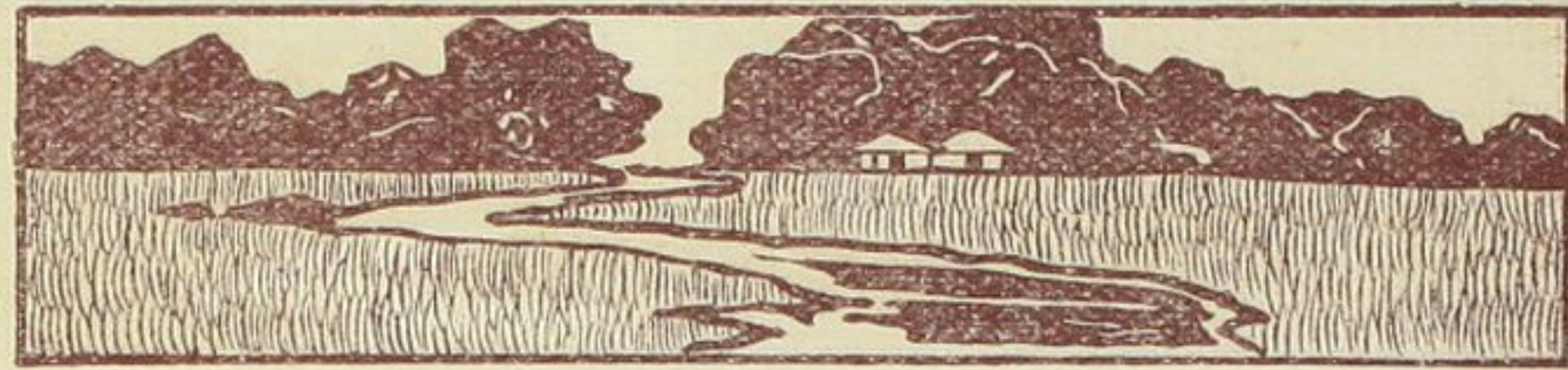
大木枝に、火ぞ吼ゆる。

火の粉は、葎葺き、屋根に散り、

手桶の水に、警戒す。

階子水旗、龍筒水、

谷を隔て、火を防ぐ、



片方の厓に、卷く燄、
狼助けを呼び廻はる。
星なき天を、直上し、
雲焼く光、緋を染めり。
火の見櫓に、鐘叩き、
庄屋の釜に、飯を炊ぐ。
谷を境に、火は消えて、
手柄争ふ、濁酒、
鳶口揮ふ、手の狂ひ、
人を殺せし、宮の前。



夜森として、里更けて、
顛く聲に、物語る、
悲劇を知らず、水車、
谷にめぐりて、夜は明けぬ。

櫻 鍛 冶

鞆に煽ふる、風の爐、
烈火に赤き、太刀のさき、
撃てば鐵鎚火花散る。

鍛ふ鋒刃、星流れ、
鏑に斐の光飛ぶ、



電凄みだれやまびき、漫理。

鐵鎚尙ほも、拍ち固め、
筋張る腕、もろ肌に、
はら／＼櫻ちりかゝる。

一撃毎に、散る櫻、
鎚に撃たると、刀の身、
花片形を、残しけり。

撃てども撃てど、凜として、
消えず崩れず、花の形、
新刃あらたなやまに光る、鎚の下。

水に煙の泡吹きて、
鐵錘かまぼ上に、置く刀、
幾花片の、痕斑あとら。

花いや散りて、鍛冶知らず、
大鎚小鎚、撃ち鍛ふ、
霞の如き花吹雪。

櫻の精の、鐵に入り、
魂残す、刃の白み、
春日輝き、人を射る。





一心亂れず、鎚を撃つ、
花神の光、いや澄みて、
爛として屋、照耀す。

鍛冶驚きて、鎚棄てて、
蓆に神を、伏し拜む、
上に散る花、舞ひ狂ふ。

芳春曲

山なき國を、春の水、
日ねもす流れ、音もなし。
緋桃白桃、影さして、

水の鏡に、色を耻づ。

青柳絲の、鼻やかに、
繋ぎ留めにし、駒はやり、
珊瑚の鞭に、風を打ち、
公子は野末に、消え給ふ。

絲遊もゆる、艸分けて、
牧場の童子、牛の背、
妙へなる笛の、曲をなし、
桃の林に、入りにけり。

霞むや春は、衣吹き、



萌黄に染めし、色濃く、
憂きを水にぞ、流がしける、
痕むらさきの、晝永し。

舞子舟

みちくる沙を、上る舟、
亂れ初めたる、櫻散り、
艶ある雪は、幕を撲ち、
反りて流に、飄がへる。
絲の調べは、楊貴妃か、
藤色小袖、緋の袴、

金扇翳さす、舟の角、
舞姫ゆかし、波に影。

羯鼓の音に、響きてや、
天冠櫛の、鬢の上、
篩ふが如く、花散りて、
舞へども落ちず、降りかゝる。

短き者は、春の日か、
横笛聲の、たばしりて、
鐘は上野か、浅草か、
花に曇りて、はや暮れぬ。



牡丹殿

玉鏤ばめる、亞字の欄、
曲れる角の、高時繪、
石橋に狂ふ、獅子頭、
椽に鸚鵡の、籠吊るす。

階まはし高き、大廣間、
金地の襖、誰れ畫く、
孔雀の筆者、古法眼、
珠簾卷く、姫、力なし。

錦の幕を、打ち廻はし、

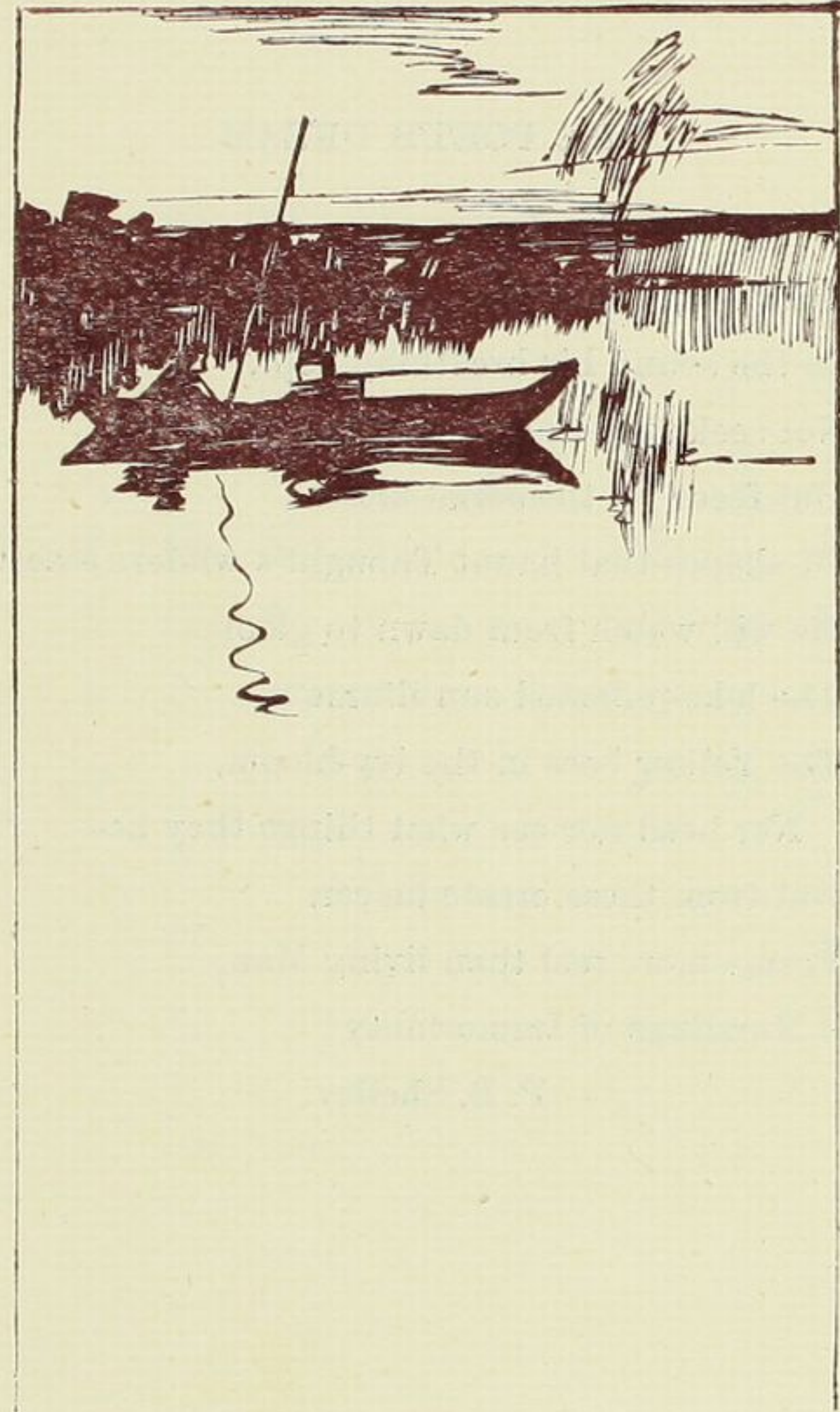
大輪の牡丹、七重八重、
紅の脣、言問は、
答へなすかも、露は零つ。

華嚴の世より、移し來て、
誰れ人間に、植え置きし。
もし花ならば、王たるに、
人と生れし、我れは愚か。

漑上吟 〔押韻〕

(一)

みをのぼる、墨田川、



我が住む、みなぎは、
まどに馳せ行く、風はらむ眞帆、
鴨やうく、波の穂々。
櫓の音、からころり、
からころり漕ぐ、舟走るめり、
鏡の面を、其上花散り。
痕なく、失せにし、
行春の、笛ゆかし。

(二)

言問はん、みやこどり、
さゝなみ、あや織り、
散るさくら花、なみのうねうね、



江の影風か沙
 のは薫へるみ
 上に落つほるちぬ
 に、拖し、そよぐ波。の、こざえ明らみ、

(三)

夢し答誰こな
 浅づへががずがれ
 む、け我とひなりつき
 、あけき、が、ひく、て、屋
 ほ、なぎさの、く、べき、行、形
 の、の、ふ、は、な、が、春、船、
 の、が、こ、し、外、に、

THE POET'S DREAM.

On a Poet's lips I slept
 Dreaming like a love-adept
 In the sound his breathing kept,
 Nor seeks nor finds, he mortal blisses,
 But feeds on the aerial kisses
 Of shapes that haunt Thought's wildernesses:
 He will watch from dawn to gloom
 The lake-reflected sun illumine
 The Yellow bees in the ivy-bloom,
 Nor heed nor see what things they be—
 But from these create he can
 Forms more real than living Man,
 Nurslings of Immortality!

— P. B. Shelley. —



けむりをへだて、歌ふ乙女の、
 イづむおぼろ、『ロウレイライ』の、
 曲いま、たけなは、
 菜ヲ因イやは、此の河は。

(四)

梅若の、塚いづこ、
 櫓こぐ、やまびこ、
 草むす岸の、昔を語る、
 繪巻かも、たろがるゝ。
 妻琴の、ねもせはむ、
 葉櫻ごしに、行く春惜しむ、
 絲のしらべは、こゑくたかむ、

狂ふは、誰れ人、
 絲切れぬ、鐘の音。

(五)

水長く、花むなし、
 しげるは、荻蘆、
 渡しの船の、渡る人なく、
 群れかもめ、江にぞ啼く。
 蘭の櫂、瀬を早み、
 右手には劔、左手に黒髪、
 美人を斬りし、藻屑の怨、
 其魂、招かず、
 橋場河岸、雨は、れず。



Sei mir gegrüsst, mein Berg mit dem rötlich strahlenden Gipfel !
Sei mir, Sonne, gegrüsst, die ihn so lieblich beschenkt !
Dich auch grüss'ich, belebt Fluß, erch, säusende Linden,
Und den fröhlichen chor, der auf den Aesten sich wiegt,
Ruhige Bläue, dich auch, die unermesslich sich anstiegt
Um das braune Gebirg' über den grünenden wald.
Frei empfängt mich die wiese mit weithin verbreiteten Teppich ;
Durch ihr breundliches Grün schlingt sich der ländliche Pfad,
Um mich summt die geschäftige Bien' mit zweibelndem Flügel
Wiegt der schmetterling sich über dem rötlichten Klee. (schiller)

野の夕暮

野の夕、むらさきの、
風しなければ、ゆるぐ音もなし。
水光かる、銀の糸、



鳶色の路、萌黄なす畑、
縫ひて合はせて、あやを色どる、
天^の鶯^の絨^は、ひろがりぬ、
見渡すかぎり、杜のそとまで、
梢をば、あかねさす、
光線の矢が、射りて日は落つ。

夕榮えし、藍の色、
天の影あり、水みつる上に。
そが上を、さかさまに、
葎^昔き宮の、影さす長し。
牧場はいづこ、羊よぶ笛、
吹きもあえず、岡の上を、



山羊逐ふ童、かへりきぬ。
田の歌は、かすかなり、
燈ともせし村、薄ぐらき路。

雑木の、闇を出で、
田毎の水に、雲の影見つ、
夢のごとく、見え分かぬ、
野末をうねる、路に沿ひきし、
我れに影あり、ふりかへり見ば、
水の上の人、路の上の人、
なは誰れぞ、こはわれか、
首を矯ぐれば、天の真中に、
かゝりける、宵の月、

影は我がかげ、こは月の影。

右手の田に、水の月、
うねりく、れは、左手の田の面、
同じ月、浮ぶめり。
左手に見しは、右手とはなりぬ。
右手に見えしは、左手となりぬ。
うねる野路、つきかげを、
ここにうかばせ、あちに湛えて、
たどりゆく、人ととも、
青葉のかほる、森へきて盡く。
夜を守る、犬の子等、



たはむれあひつ、吠え立てけるは、
めづらなる、衣きつ、
都よりきし、人異しむか。
古りにし榎、葉もて枝もて、
天井の、格子編み、
月は漏り透き、下に我立つ。
神か我れ、神のごと、
犬吠えずなり、夜は寂びれけり。
小川には、水ぐるま、
めぐりやみてや、小屋に音なし。
光かる渦、うつる月、
月は洗はれ、水はきらめく。



はんの木たかく、空をかぎれば、
此の内の、境こそ、
平和の世なれ、神の宮なれ、
琉璃の帯、我れをびん。
月の鏡は、神やかけゝめ。

江上の虹 〔押韻〕

我が満腹の、錦繡かも、
我れ織り出す、花の雲、
満天白く、棚引きし、
春盡きて後、一快事なし。
胸中の奇を、いかにせん、



焚ゆるエトナの、噴火山、
吹雪くスウエスの、雪なだれ、
狂ひて五采の、筆を踏み折れ。

江は夕榮えて、夕立す、
銀の箭横に、亂射す。

天の一方、青嵐、

我が肺もゆる、火は赤し。

我が吐きし火か、虹長く、

光萬丈、闇闇を擣く。

長劔抜けば、虹となる、

短劔抜けば、霓となる。

天の石弩、張りしごと、

江天に懸く、青雲のそと。

眞帆其の下に、五色染み、

風漣疊む、江の嵩み、

汐も五色を、色どりぬ、

萬象を染め、繪の如くしぬ。

我れ長嘯す、墨田川、

波鼓盪して、立つみなは、

燦たる五采の、玉くたく、

錦の橋を、誰れかゆく。

夕日かゝやき、雨白し、





我れ此奇あり、人の知るなし。

風の江 (三節同韻)

南より吹く、風勁し、
帆馳せる舟は、箭の如し。
江に開きたる、玻璃の窓、
飛ぶ帆の影す、屋根の角、
波の光りは、玉くたく、
水音みだれ、きしや裂く。
萍からむ、みをつくし、
満ち込む汐の、勢はやし。



釣り舟なやむ、川の淀、
鷗は洲に起ち、驚けど、
羽ばたき重く、力なく、
なぎさに墜ちて、浦に啼く。

空かきくもる、雲の脚、
小梅の村に、立ちけらし。
崩づれ初めたる、填築土、
浪戒めや、舟板戸、
柁折るゝ音、江に響く、
舟心せよ、覆へらまく。



江の曙 〔押韻〕
久方の、光のどけく、
朝煙り、ねり絹を拖く、
曉の、ましるなる空、
あかく染む、水雲の裏、
麥の葉に、散る玉飾り、
靄の布、縁のあやどり、
紅梅に、刺せし細絲、
亂れ初む、蘆そよぐ音、
葛匍ふ、岸の衝立、
石竹の、簪さす土手、
あやめ草、誰が着し衣、



天人の、時服なるかも、
よべの舞、はすれて行きし、
むらさきの、春の香淨し。
揚雲雀、雲井になきて、
萌黄いろ、にほふ野のはて、
たゞ一點と、なりてぞ失せぬ、
告げやなれ、『こゝにあやぎぬ、
とり來ませ、天津乙女』と、
我が爲めに、傳へ我が言、
朝雲の、日の輪はめぐる、
帝の宮、こがねぞひかる、
薄紅に、みなわを染めり、



うすものは、江に擴がれり、
裏を透き、ゆらぐさゝなみ、
銀鱗の、紋をちりばみ、
櫓のあと、織り目を崩し、
雪輪をば、波に畫きし。

茂み掩ふ、薄紗の消えて、
葉櫻の、目にきらめきて、
柵引く、縞は、水いろさめぬ、
池の面に、鵝鳥浮びぬ、
その岸に、薔薇香ばしく、
芍薬の、べにいろ濃く、
水鏡、化粧をうつし、



葉の几帳、藥玉輕し、
力なき、葦亂だるした、
影したす、花かきつばた、
紫の、續づく玉の緒、
水清く、泳ぎ浮く魚、
底の藻を、ゆりうごかせる、
萍みづかに、鱗の影する。

舟歌の、笈とたえて、
若葉せる、岸静まりて、
煙筒に、煤吐くけむり、
大空を、眞直にのぼり、
くろ金の、器械の動き、



瀟笛ふく、音のするとき。
 静かさの、やぶれしうち、
 働らける、音は荒ら立ち、
 瀟車はしり、瀟船の馳する、
 ろをほかの、世としやはする。
 杭の邊に、釣竿しげし、
 車井戸、水くむせはし、
 寂びれしは、しばしがひまぞ、
 曙の、痕はいづこぞ。

小庭 (押韻)

文よむまどの、下の庭、



姫百合の葉に、蒼さし、
 瞿麥赤き、垣のきは、
 紫陽花團き、毬をなし、
 とび石めぐる、裏の脊戸、
 松葉牡丹の、咲きしきり、
 椎の木の下、椽の角、
 鹿の子斑らの、綾を織り、
 にしきを韓輪に、そめ分けて、
 花むしろをば、掩ひける、
 上を笹蟹、匍ひ出て、
 棟にかげろふ、舞ひきたる。

薛蘿の牆の、外の浦、



岸に小波、きらめきて、
幻動く、天井裏、
舟漕ぐ櫂の、影うきて、
水の疊を、迂り行く、
白帆の絶えま、鵝鳥呼び、
菝切鳴ける、江の廣く、
静けき水に、幾たゞび、
まんまるき輪の、晝かれき、
魚の躍りし、跡ならめ、
日もすがら坐す、風の軒、
閒を貪ぼる、江のかもめ。

Die Luft ward sanfter; es deckt ein bunter Teppich die Felder,
Die schatten wurden belaubt, ein sanftes Tönen erwachte



Und bluh und wirbelt' umher im Hain voll grünlicher Dämmerung.
Die Bäche jähbten sich silbern, in Luftraum flossen Geräusche,
Und Echo höret' im Grunde die fühle Floke des Hirten.
Die Lerche steigt in die Luft, sieht unter sich Klippen und Thäler,
Entzückung tönet aus ihr.—Der Klang des wirbelnden Liedes
Ergötzt den ackernden Landmann.—Er horecht ein Weilchen dann
lehnt er.
Sich auf den gleitenden Plug, Zieht braune Wellen ins Erdreich,
Verfolgt von krähen und Elstern—Der Stemann schreitet gemessen
Und wirft den Samen ihm nach; die Zaekige Eggebewälzt sie
Mit einer ebenen Decke.—(Kreist)

蜀山賦

《島田曉舟の巴蜀に之くを送る歌》

巴峽巫峽の、瀬を早み、



泡立つ流れ、石をつき、
天門の山、中斷し、
日邊よりの、一と片帆、
楚江を君や、上ぼり行け。

白帝城は、雲を刺し、

八陣磧、虹の旗、

孔明の跡、のこるとや。

楚王臺上、猱よび、

游子は袖を、絞るべし。

灑瀨堆の、隠れ岩、

馬の如くは、君のぼれ、

峽江の岸、盧橘生へ、

金銀の氣は、夜光る、

君行く蜀の、谷深し。

蠶叢の國、指して行く、

蜀帝の魂、ほとゝぎす、

啼かば山竹、裂けもせん、

君を送くれば、五月雨に、

一聲胸を、貫けり。

相如の酒を、賣りし市、

楊雄の、玄を艸し、里、

孔明梯、かけし山、



楊貴妃李白、生みし邑、
三蘇の文章、蜀に出づ。

巴郡の山は、鐵を産み、
内江の井に、鹽を噴き、
海棠に續く、木藥花、
錦雞荔枝の、實を食ふ、
美神の宿る、國とかや。

時八月の、星槎ほしいかた、

雲井に浮ぶ、天の河、
支機石近く、溯ぼれ、
織女の星の、玉の梭、

錦を織りて、君を待つ。

行けや長江、八百里、
巴蜀の瀬川、灘險はし、
蜀道難を、歌ひ行け。
孔明の魂、瞑せずば、
世を救ふ道、問ひ來ませ。

山水問答

吾妻の比叡、山寂びて、
上人居ます、夏木立、
朝夕何の、消息ぞ、



石の上の雲、寒古鳥。

墨田のみぎは、我が庵、
舟歌とたえ、帆は歸り、
日もすがらたゞ、我れ見つる、
さゝなみの影、青嵐。

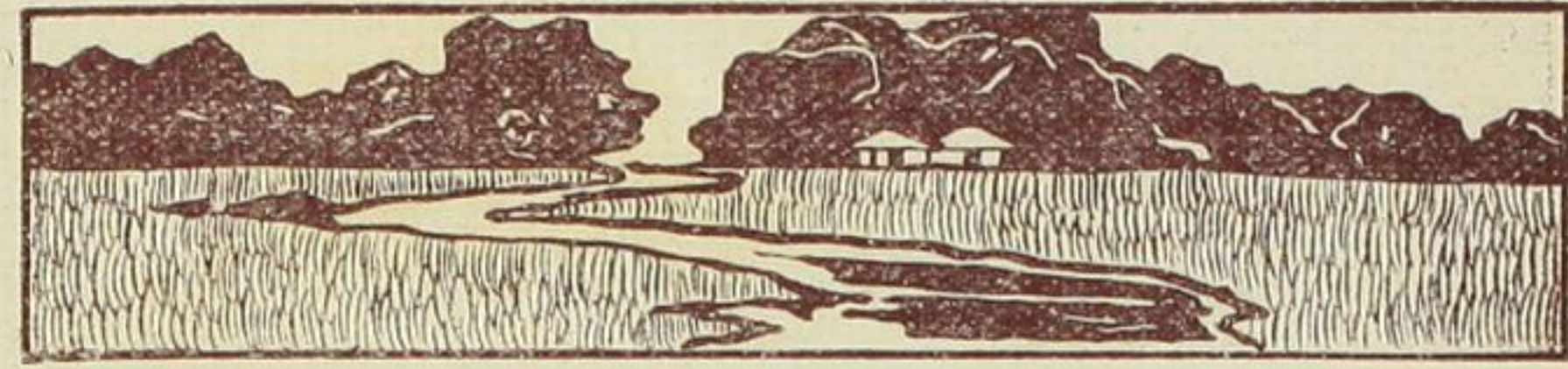
山を仁者の、樂むか、
水をば智者の、樂まん。
『清淨の身は、山の色、
長廣の舌、水の音』。

水 鶏

我が脊子來べき、宵更けて、
五月の闇に、星もなく、
立花匂ふ、我が板戸、
待つ人もなく、夜や詫びし。

空かきくもる、雨蛙、
人も寝させず、誰れを呼ぶ、
物を思はず、江のほとり、
ともし細ろれば、心うし。

木履の音す、水の門、



岸踏み鳴らす垣の外、
興に乗じて、友や來し、
柴折戸明けば、音もなし。

かく夜の更けて、音づれん、
約しなければ、こは怪し、
人弄ぶ、戯れか、
水雞ぞ叩く、庭の石。

郭 公

葵の花に、夕暮れて、
映山紅岩に、咲きしきる。



杜鵑行

唐 杜子美

君不見昔日蜀天子。化爲杜鵑似老鳥。寄巢生子不自啄。
 群鳥至今爲哺雛。雖同君臣有舊禮。骨肉滿眼身羈孤。
 業工竄伏深樹裏。四月五月偏號呼。其聲哀痛口流血。
 所訴何事常區區。爾豈摧殘始發憤。羞帶羽翮傷形愚。
 蒼天變化誰料得。萬事反覆何所無。萬事反覆何所無。
 豈憶當殿群臣趨。

佛燈の火影、ほのぐらく、
 參禪の鐘、日を落とす、
 華幡吹く風、収まりて、
 雨山門に、降りしきり、
 満山黒く、人を刺す、
 蚊のみ闇をば、横行す。

橘薫ほる、維摩堂、
 越王竹に雨の、注ぐ時、
 雲の絶間の、薄明り、
 五日の月の、眉畫く、
 山彦響く、西の山、
 扉を閉ざす、鍵の音、



其瞬間に、ほととぎす、
佛殿ふるひ、裂けんとす。

菩薩も泣けや、阿羅漢も、
此聲聞かば、皆泣けや、
戀にやつるゝ、世の衆生、
億萬無量、泣く今宵、
救へ此苦は、人の身か、
なれの志願の、満つる夜ぞ、
鐵如意石を、打ち碎く、
是れほととぎす、鳴く聲か。



磯の雨

浮寐淋しき、磯傳ひ、
何とよるべの、捨小舟、
鴨立澤の、蘆茂く、
身を漂はす、五月雨。

よしや契は、薄くとも、
天に翼を、比ぶべき、
ゆかりの君の、行く末や、
思に悩む、虎の前。

富士の裾野に、飛ぶ羽蟻、



鮑かたの音の、たえし隙、
小松の語る、日は高し。
積み重なれる、藍の色、
海を隔て、山遠み、
水と天との、縫目なく、
仙女の華鬢、浮く淡し。
籐椅子の睡り、覺めし時、
風欄干に、注ぎ來て、
夏衣染むる、青嵐、
是れ山の色、波の色。



篝火消えし、狩の館、
死に後れしを、泣く夕、
涙篠つく、磯の雨。

青嵐

藤色うすき波の絹、
小襷積を疊む、鱗形、
漁笛の腔に、曲たえて、
烏陰の帆は、夢を出づ。
蚕の釣舟、浦風ぎて、
網干す村に、舟造くる、



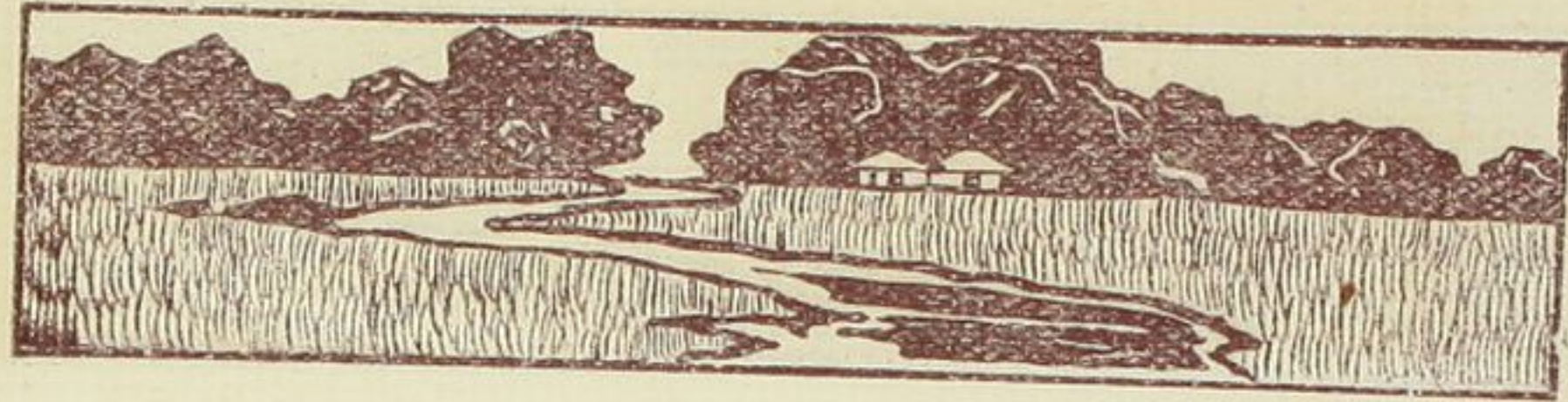
雲の峯

鳴神うてる、天鼓にや、
大空近く、わなゝきて、
崩れ初めけり、雲の峰、
積みば崩るゝ、我が思。
晝の長きに、世をかこつ、
簾卷く手も、ものうしや、
玻璃の圓きが、金魚の、
楽しき世界、なるものを。
うつ蟬なける、夏木立、



岩清水

雲の峯いま、倒れなん、
撃ち合ふ雲の、縁とりて、
銀の稻妻、めばたきす。
蟻の戦、たけなはに、
夕立こそは、戒むれ、
引いて還るを、雲の峯、
立ちては崩づれ、已みもせず。
冠の塵を、弾くとも、
髪の垢をば、拂ひこそ。



我れ手に掬ぶ、岩清水、
飲めば骨さへ、涼しきに。

耳を洗ひし、カミ聖あり、
聞きし汚れを、去るとかや。
物言ふ舌の、根を清む、
我が唇に、言葉なし。

覆盆子の、赤き、そを見れば、
舌に湧く唾、口を突く。
摘まは葉の下、草の陰、
蠅蛭なきかや、山なれば。

瀧壺浅く、沙清し、
瀬の石さゝれ、透きて見ゆ。
夏は冷たき、ものところそ、
清水に知らば、憂きもなし。

短夜

鼻鳴く山、小夜更けて、
蚊遣りの僧は、定に入り、
文殊の龕、大鼬、
鼠を殺す、壇の下。

目を光らせる、墓、



厓の熊笹、靡く音、
闇に大蛇の、行く如く、
夜満山に、衍なす。

夢魘はれて、安からず、
銅版敲く、毘盧堂、
伽藍乍ち、震動し、
崩れかゝるや、鐘を撞く。

宵の蚊柱、また群れて、
襲ひて來しか、さはあらず、
隔たる方の、經の聲、
鈴鳴り木魚、譜をなして。

塔の影透く、東窓、
鶏啼き白む、池の水、
短夜を知る、蓮の花、
厨に魚板、折ち出だす。

破衲の沙彌の、竹箒、
板戸の外に、苔掃ふ、
旭は山の、松を射り、
あはれ一夜は、とく明けぬ。

瀧 殿



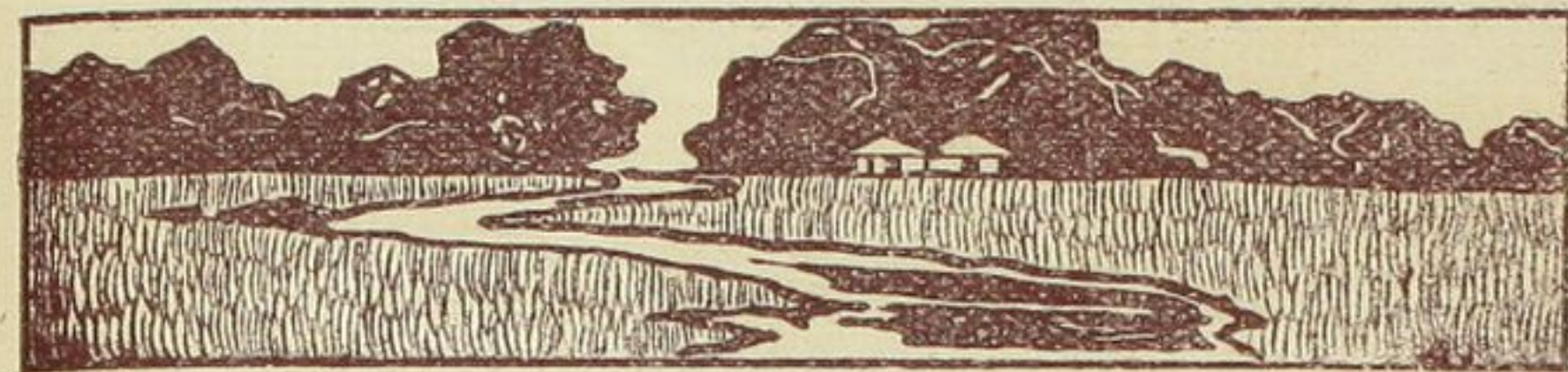
珠編む簾、岩の室、
揺られて垂るゝ、三千丈、
天より注ぐ、風の底、
銀河を倒ほす、欄の角、
我れ瀧殿に長嘯す、
厓裂け石は、飛ばんとす。

谷掩ひたる、高天井、
青葉の枝を、組み成して、
天蓋翳さず、紗の緑り、
世をば限りて、隔てたり。
我とこしへに、世を謝して、
茲に麋鹿と、遊ばんか。

蓮花舟

大乙の、星は淨きを、
愛でしとや。はちすの葉をば、
舟となし、泛べませしは、
夢なりしかも。

葩の、露やこぼれて、
玉となれ。散るも其葉に、
といまらば、今宵も來べき、
星をやどさん。



葉は君を、乗せし其舟、
ゆくりなく。花あかしとも、
白しとも、開かば君の、
衣なるべし。

脱きませし、今朝の衣の、
數多し。舟やいづれに、
乗りまし、うつり香清し、
散るも怨みず。

富士詣

武藏野の末、雲の峰、

天つ舞姫、おとします、
白地に光る、銀梨地、
倒さの扇、見えもせず。

金剛杖を、甲斐に突き、
六根清淨を、我れ唱へ、
富士越へせしも、夢なれや、
檜の笠を、忘れきし。

白衣の行者、鐸を振り、
日の出に咒文、念じける、
金明の水、銀明水、
神代ながらの、雪の汁。



竹取の姫、なつかしき、
雲の通路、行かまほし、
詣づる人も、多からめ、
言傳てんかも、そは悔やし。

涼み船

筑波の峯の、青嵐、
髻ならぶ、女男山、
簀戸の囁き、影低く、
水音や涼し、屋形船。



水色浅く、染分けし、
帷子そよぐ、河の風、
裾の亂れを、戒めて、
繪團扇おとす、船の床。

樓臺暮天に、夕焼けて、
影さす水は、きらめきぬ。
水精の蓆、敷く如く、
上、明星の珠光る。

蘆の葉のみぞ、音づれて、
玉琴鳴らす、調べたえ、
船歌疎き、星の影、



莊嚴輝く、威の力、
地平の線に、至るまで、
鐵を貫く、光もて、
都の晝を、鎮壓す。
地に匍ふ人の、憚りて、
日傘の下に、隠れ行き、
電線林を、なせる底、
車の軋しる、音かすか。
天に徳あり、恩を布く、
雲夕立ちて、日を諫め、



汐に乗り行く、墨田川。

炎 天

岑樓高く、雲に入り、
天風衫衣を、吹き拂ふ、
夏日亭午の、大江戸や、
百萬餘戸の、鬼瓦、
下は武藏野、果てもなく、
今は都の、瓦屋根、
蔓を並べ、きらめきて、
日の氣のもゆる、廣小路。



猛き力を、柔らげつ、
平和を保つ、天の則。

風は天より、吹き卸ろし、
光は地より、反射なす、
若し風なくは、火の世界、
動物植物、焦げ死せん。

自由を愛づる、風の神、
無数直射の、矢を吹いて、
光の熱度を、殺ぎ奪ひ、
畏服の民を、慰めぬ。

我れ天を見る、たゞ咫尺、
風の翼に、載せられて、
反射の熟の外に立つ、
炎天の威は、我れ知らず。

蚊帳の月

河風蚊帳の、波を巻き、
月影涵たす、たかむしろ
涼し夢路に、満つる汐、
櫓漕ぐ節の、誘ひ来て、
水に浮ぶか、夜もすがら。



廣寒の宮、嫦娥住みて、
下界の川に、水を汲む、
銀の漣、玉の壺、
揺らぐは袖の、總の影、
水晶の鞠を、打ち飛ばす。

天女の舞の、婆娑として、
無数の天葩、降り亂る、
是れ金桂の花なりや、
『清凉界へ我行かん、
なれ諸共に來よ』といふ。

夢なりしかも、『我行く』と、

答へし刹那、はや失せて、
蚊帳に月影、波の影、
軒下通ふ、柴の舟、
月に下るか、棹の音。

明星

大江暮れし、闇を衝き、
光力强く、輝きて、
水に光の、圓柱、
倒せる長さ、三百丈。

『ドラモン、ライト』、比べ得ず、



月より強き力あり。
鋭き光は、浦を射り、
魚の影さす、鱗の尖。

船漕ぎ去れる、波の痕、
光の柱、波動をなし、
銀の曲線、江に亂だれ、
水に碎くる、玉簾。

明星歌ふ、詩の子等よ、
かゝる美を觀し、ことありや。
我れ手に掬ぶ、江の淀み、
銀汞液か、琉璃の水。



夜の神聖

渾天動く影もなく、
穹窿高き星の宿、
銀河は聲なく運び行き、
地球は靜かに廻轉す。

大熊星の傾きて、
『ベガサス、スクエア』昇ぼる頃、
矢の星かゝる天の弓、
北冠星はきらめきぬ。



黙想深き夜の闇み、
世を取り巻いて形なく、
人工死して、働かず、
寂たる天地は冥合す。

晝動物の蠕動して、
汚がし、跡を葬むりぬ。
陰謀疲れ睡むる時、
魔の犯すべき隙もなし。
雲衝き立てる煙筒も、
天に跨がる鐵橋も、
野草の花も森の木も、

地の凹凸も廣狭も。

天女の衣縫ふ如く、
つぎ目なきまで密着し、
電燈青く細そり行き、
唯だ一枚の黒き色。

大理石鑄る大塑像、
白晝人に誇るべし。
櫃に飯なき裏の町、
宵は蚊蚤に苦みし。

威力の休む此世界、



血の心臓に動く外、
肺の息する躰のみ、
苦樂は共に忘れぬ。

無人の境神の國、
理論なければ智見なし、
天は静かに更け渡り、
極星運ぐる紫微の垣。

凡ての虚飾剥ぎ取られ、
裸體の自然露出して、
技術を假らぬ其形、
平面載する半圓球。



現世は夢幻に合せられ、
過去も未來も、一となる。

生死は人の大事とや、
神經既に、感もなく、
作用を止めて死せし今、
勇も智も亦何かせん。

有機は無機に合體し、
大平等を形成す、
原素の調和を誰か知る、
分拆術は證し得ず。

社會を組める人の數、
夜は組織を融着しぬ、
諸種の相對、化合して、
桎梏凡べて消滅す。

無限の宇宙を包括し、
積極消極中和して、
合同なせる全體を、
男性女性に分け得んや。

秩序なければ法規なし、
統治の權も、死に睡り、
缺點汚點を一掃す、



夜の神聖誰れか知る。

神願くばとこしへに、

夜の平和を續けませ。

日の光線は普及せず、

陽ひなたと陰かげとを判別す。

中天照らす日の真中、

尚ほ物影は薄暗らし。

寧しろ凡てを一にせる、

大闇黒ぞ平和なる。

晝の秩序は威力なり、

静けき夜は調和なり。

排列なせる曲線は、

密なる抱合に如くはなし。

聖凡賢愚何の別、

貧富強弱何の戯ぞ。

混一すれば物我なく、

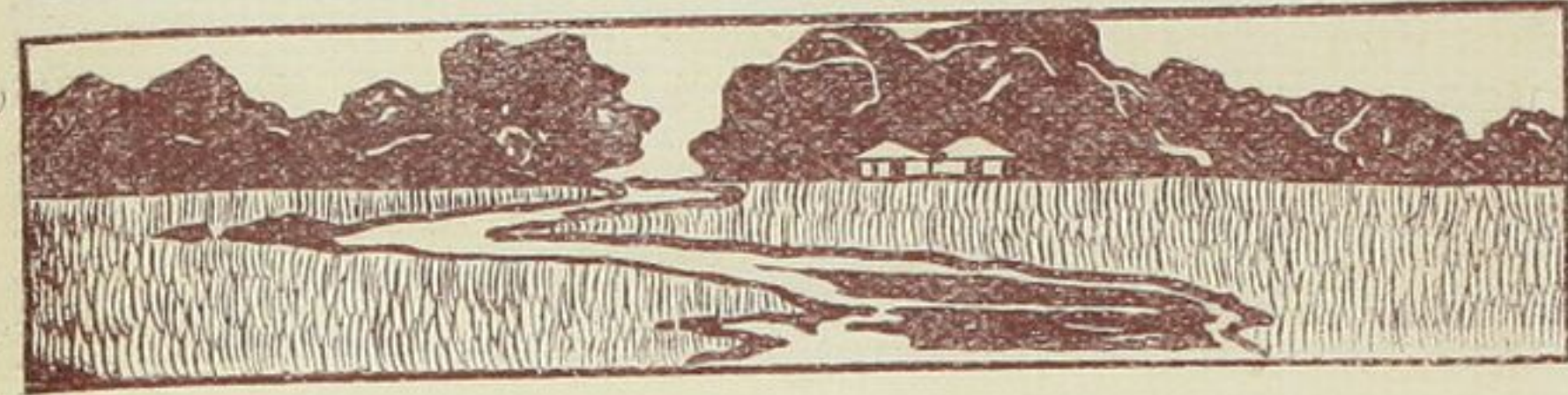
天上天下調和のみ。

夜は晝をば結論し、

今前提を歸納せり。

真をば極め、美を極はめ、

善を極むる是れ夜か。



哲人遠き、死の夜に、
我れ今誰れと睡らんか、
再び覺めずとこしへに。
夜の神聖誰れか知る。

午 睡

河風長き晝を吹き、
書院に簾波をうつ、
庭に小枝の動く影、
簷馬は獨り忙はし。

手に繙ける戦争史、
卷酣なはに進軍の、
金鼓を鳴らす折をしも、
寂寞破ぶる鵝の叫び。

智勇秀でし古英雄、
霸氣縦横に驅逐せし、
雄圖はいづこ江の流れ、
亂れて崩づる雲の峯。

弓と槍との外知らぬ、
戦士を誰れか無智といふ、
彼れに火薬を教へばや、



水雷地雷見せまほし。
城を摧きて血を流がす、
破壊の力慘なりや。
大砲を並べ戦へど、
尙ほ文明の智者ならじ。
電氣の仕掛鐵の武器、
火力水力用ゆとも、
未開の族の戦ぞ、
世界の智力幼稚なり。
風船飛ばす何の見戯、



潜水艇は玩具のみ、
智を鬪はす今の世は、
後來る代にそ笑はれな。
夢の羽風のたゞ輕ろく、
我に不思議の秘ありて、
世に争ひを征服し、
民を午睡に導かん。

梁父の吟 (押韻)

我れ歌はん、
梁父の吟、



君見ずや、
尾張の奴僕、
草味一躍、
叱咤し盡して、群雄靡く。
手に日を捧ぐ、帝の關白、
一たび赫怒し、高麗の山裂く。
舳艫を啣んで、兵船萬石、
鴨綠の水を、逆さに渦卷く。
萬里長城、飛樓傑閣、
崩れざらめや、石火矢ひとく。
八駿はやし、



劍に倚る、
月闌干。
君見ずや、
克魯倫河南、
大戈壁の天、
石弩おつ取り、起つ騎馬八千。
其長ば誰そ、成吉思汗、
裏海黒海、浴槽とやせん。
チユトンの騎士、スラブの將軍、
城郭守らず、鉾や折れけん。
敵やはある、葱嶺天山、
陸十萬里、是れ我が庭園。



いで我が長劔、
鞘を拂はん。
草も木もはた、斬りて薙ぎなん。
勇者の道の、
前に悪魔の、
邪しまぞ充つ、天の又地の、
金無垢ひかる、金十字架の、
かげいま見えず、瑞典王の、
名のみ香ばし、萊茵の夏野、
ゑむあり側へに、大鬼小鬼の。



乗て我れ來し、
颯たる天風、鬣を亂だし、
北斗南星、兜に翳ざし、
虹を母衣とし、雲を塵とし、
鳴神稻妻、先驅となし、
亞細亞大陸、喜馬拉亞風、
我れ行かんかも、鎧しめかし。
日月の宮、
あなまつ黒や、
天の磐戸は、誰れ閉ざせしや。
我れに弓あり、金の矢銀の矢、
荒鷲射らん、磐戸明けよや。



梁父は、
 哀し、歌は。
 是れひしげ、詐りは、
 呼び招ねけ、荒し男は、
 獅子ぞ往みぬる、椰子の森には、
 深山大澤、英雄なきやは。

李白依爲曲。
 梁父吟。始于曾子。後諸葛孔明作之。

長嘯梁父吟。何時見陽春。君不見朝歌屠叟辭棘津。八十西
 來釣渭濱。寧羞白髮照清水。逢時吐氣思經綸。風期暗與文
 王親。大賢虎變愚不測。當年頗似尋常人。君不見高湯酒徒



起草中。長揖山東隆準公。入門不拜逞雄辯。兩女輟洗來趨
 風。東下齊城七十二。指揮楚漢如旋蓬。狂客落魄尚如此。何
 况壯士當群雄。吾欲攀龍見明主。雷公砰訇震天鼓。帝傍投
 壺多玉女。三時大笑開電光。倏爍晦冥起風雨。閻閻九門不
 可通。以額觸關闕者怒。白日不照我精誠。杞國無事憂天傾。
 狡獪善牙競人肉。驪震不折生草莖。手接飛猱搏彫虎。側足
 焦原未言苦。智者可卷愚者豪。世人見我輕鴻毫。力排南山
 三壯士。齊相殺之費二桃。吳楚弄兵無劇孟。亞夫貽爾爲徒
 勞。梁父吟聲正悲。張公兩龍劍。神物合有時。風雲感會起屠
 釣。大人峴峴當安之。

李白

大田菊洲を憶ふ

天の上よりなれ墜ちて、



など地を履んで不平なる、
高き理想にあこがれて、
焚ゆる焔は胸に充つ、
吐けば電火の走る世に。

劍を花下に振りし夜、

鐵杖山を馳せし時、

なれ病むべしと知らざりき。

伊豆の荒磯浪ぞ拍つ、

汐の戦ひなれと見ん。

十幅つぎし大畫仙、

なれが描きし大達磨、

是れ本來の面目か、

なれが形は皎として、

玉樹の開く如しとも。

神天才を憐めや、

たゞ願くば冥助あれ、

彼れ滿腹の雲烟を、

詩卷に染めてとこしへに、

天地に留めしめ給へ。

長男爵を悼む歌並に短歌

あまかける、雲雀に問はぬ、



行く春の、ふる里の野は、
花散りて、みなは流れて、
犀川の、若鮎さばしる、
七つ瀬を、筏くだらん。
玉の鞭、駒なめし君、
繡の鞍、素袍きし君、
行きしいづこに、くれなるの、
春ふかみ草、花落ちぬ。
韓にしき、錦のきぬに、
青柳の、糸もて君を、
繡にせんかも。



〔男爵長克連うしは、長谷部信連卿の後裔にて、加州七家の一におはせり。去年のとし、男爵を受け給ひて、僅かに一とせばかり、はやみまかりたまひしは、哀しともかなしきことの、げはみなり。うしは和歌の道を、ふかくめで給ひ、また馬術をも好みませき。幼き頃、もろともに、文などものしつ、行きかよひせしも、十年の夢、そも夢なりき。あはれ兜率の天に、はやのぼりましぬ。哀しさにたえず、此歌をものして、遙かに柩の前に寄せき。〕

大橋乙羽君を挽す

(一)

橘匂ふ五月雨や、
人を思ひに惱まする、



晝岑寂を嘆こつ時、
蜘蛛の絲繰る物憂きや。

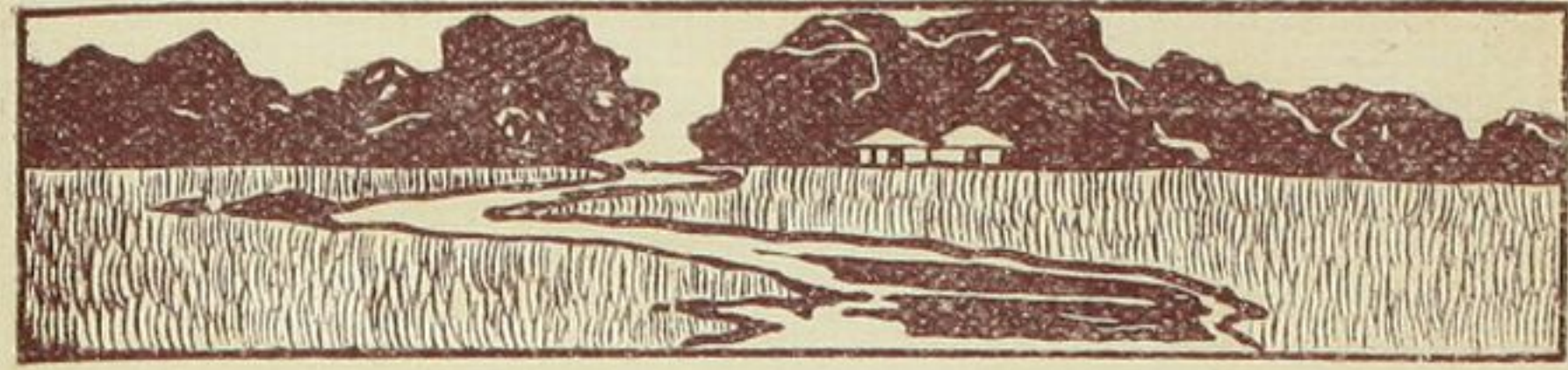
石に蝸牛殻を出で、
篆字の文を残り行く、
是れ蒼鷺の去りし跡、
銀の涎に何を書く。

此日いましてが世を蛻けて、
帝の傍への玉案、
無窮の巻の初頁を、
白玉樓に讀むとかや。

(二)

羽前の山の曉の雲、
笈負ふて鳥の啼く、
吾孀の都したひ來し、
野にまだ汽車はあらざりき。

十露盤捨て、筆取りし、
手に菅笠の緒をしめて、
關八州の初嵐、
都へ吹かれ上ぼりしが。
文名天下に轟きて、



短かき歴史十二年、
花鳥山河を縮圖せる、
著書に詩才を人ぞ知る。

(三)

山の姿や海の色、
意匠凝らし、寫真術、
今はいましの眞影を、
佛と祭つるあなわはれ。

エツフェル塔は天を突き、
ナヤガラ瀑は陸を裂く、
世界を周ぐり盡くす後、

尙ほ見ぬ國を見んとかや。

『西方見ざる域ありて、
乙羽は筆を載せて之く』
我れ唐歌に思ひきや、
今はの識をなさんとは。

(四)

都に出で、十二年、
歸朝してより九箇月、
終りの半ばは牀に伏し、
いたづき篤く春暮れぬ。



病牀に伏し、雪の朝、
同日なりしは何の縁、
いましは重く我れ輕し、
誰れ皇天を無私といふ。

梅散り櫻咲きしきり、
我れ陽春を歌ひしに、
いまし藥罫に瘦する影、
咽に乳やる力なし。

(五)

青葉若葉の郭公、
墨田の移居を行いて告ぐ、

いまし喜びほゝ笑みて、
涼みの句會を約せしに。

曙淺き梅雨の空、
伏戸寂びしく水鷄鳴く、
此朝いまし世を厭ひ、
など天上へ急ぎしか。

浮世に置きし片見あり、
玉の如き子菩薩の子、
地中海より寄せし文、
今遺言とならんとは。



(六)

昨日は日本の乙羽生、
今日天上の乙羽佛、
佛の子をば地に留む、
魂魄永く呵護せや。

此子無窮の世より来て、
此世の父に代はるべし。
嘗て無窮に來しいまし、
無窮に去りて今いづこ。
世に千年の壽はあらじ、

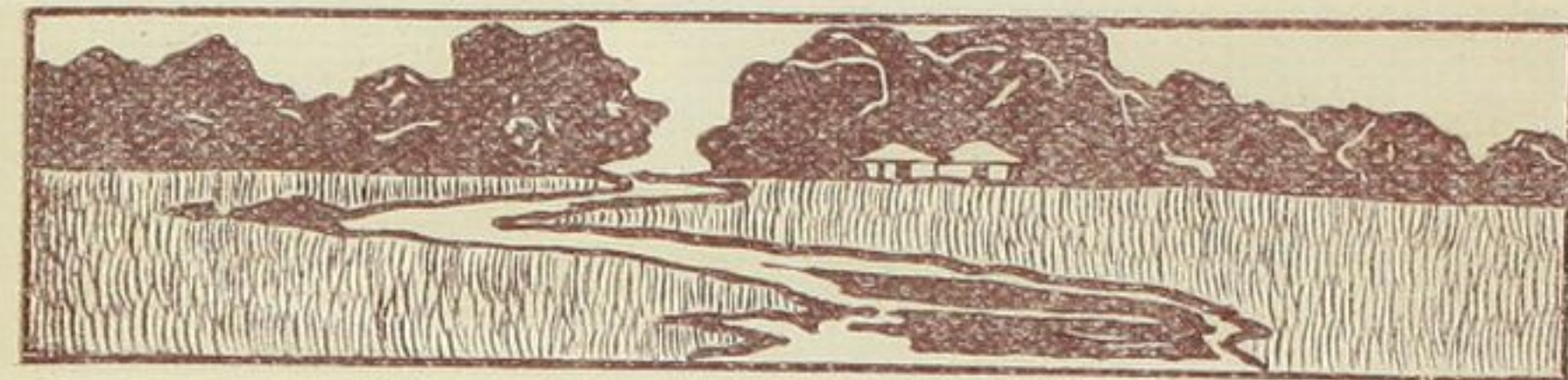


(七)

不死の藥を誰れか采る。
榮枯も生死もなき國へ、
先だち行きし是れ賢か。

いまし天地にとめ置きし、
著書は乙夜の覽に入り、
乙羽なる名は喧傳し、
竹馬の童子も之を知る。

此世に既に恨みなし、
天にこたひは神となり、
文昌星となりませや、



『ミユズ』の神と並びませ。

文殊菩薩の繪圖の像、
是れ愛翫の幅とかや。
佛天指して行きまさば、
いましの畫像これなめり。

(八)

世界の美術集め采り、
意匠新たに組み成して、
世に應用の時を得ず、
いまし徂きしは惜むべし。



一枝の筆に拮据して、
あらゆる苦痛と健闘し、
凱歌にかざす桂花冠、
さればいましに憾なし。

我れ瓜剪りて沐みして、
柩に捧ぐる歌の調、
よし拙なきも人や玉、
哀しむ心を享け給へ。

金曜の凝血 〔挽星亨氏〕

熱き血汐の眞紅もて、



白綾「チョッキ」を染めあへね、
稻妻胸に迸ばしり、
刹那の魘夢はゆめならず。
怪しき虹は右手の腋、
望の胸を貫きて、
重き翼に力なく、
鶯地に墜ちて荒れもせず。
椅子に靠たれし樓の上、
晝運命の星殞ちて、
荒肝ゑぐる逆刃、
恩讐あらず是れ命か。



長「テール」に打伏して、
魔の囁きに聞く間なく、
市會の室に僵れたる、
絨緞永く恨あり。
ケ―ザ刺されし金曜日、
最後の呼吸は魔の聲か。
『生きて萬戸の侯たらず、
死して閻羅の王たらん』。
棺を蓋ひなば事畢る、
大盗忠となる此世、
虚偽と偽善と充塞す、



罪脊負ひしぞ男らし。

魔に咀はれて悔ひもせず、
あはれ濁世の犠牲たる、
なれ鮮血に地を洗ひ、
世の罪惡を清めかし。

戸隠探検隊を送る〔押観〕

行けよ男の子等糧つとひ、
塵萬丈を手に拂ひ、
筑波嵐を脊に負ひて、
檜の笠の紐しめて。

信濃路石の山崇く、
瀧つ瀧せきて水は涌く、
谷に衣をひるがへし、
兩腋風をば生ずべし。

のぼれよ戸隠古仙山、
絶頂天を去る二寸、
削り成したる玉の骨、
逆鋒並ぶ神の峯。

役の行者の鐵の杖、
錆びつく石の崖聳え、



上、晝の月淡白ろし、
下、谷巻くや青嵐。

餘吾將軍の撃ちし太刀、
鬼女の斬られて失せし後、
蟲捕る董、生へしける、
是れ血の痕か斑らなる。

旭日の如き木曾冠者、
白旗揚げし宮とかや、
古りし瑞垣そを圍む、
花石楠の色赤かむ。

羽ある人や雲の君、
銀河の御簾を山に編み、
掲げ待つとやのぼりませ。
行けや男の子等行きませ。

童子の歸省を送る

〔中橋氏の子年十二獨旅にて浪華に歸省するを
品川に送りてよめる〕

七砲台の海風ぎて、
沖に消え行く真帆白帆、
袖が浦風東より、
なれが歸るを吹き送る。



十二に足らぬ子の猛り、
白洋服の半『ズボン』、
繪『カバン』肩に打ち掛けて、
浪華へ獨り旅の汽車。

富士の裾野に日は落ちて、
琵琶の湖水に夜は白み、
次ぎの晝には家に入り、
父母に都の物語り。

行けや猛き子夜を籠めて、
列車に夢を揺られ行け、

東海道の青嵐、
行けや猛き子いぢゝらば。



Beyond the limits, of the shadow cast
By the broad hill, glistened upon our sight
That gay assemblage. Round them and above,
Glitter, with dark recesses interposed,
Casement, and Cottage-roof, the stems of trees
Half-veiled in vapoury cloud, the silver steam
Of dews fast melting on their leafy boughs
By the strong sunbeams smitten, like a mast
Of gold, the maypole shines; as if the rags
Of morning, aided by exhaling dew,
With gladsome influence could reanimate
The faded garlands hanging from its sides.

(Wordsworth)



白山の絶頂 (押韻)

(一)

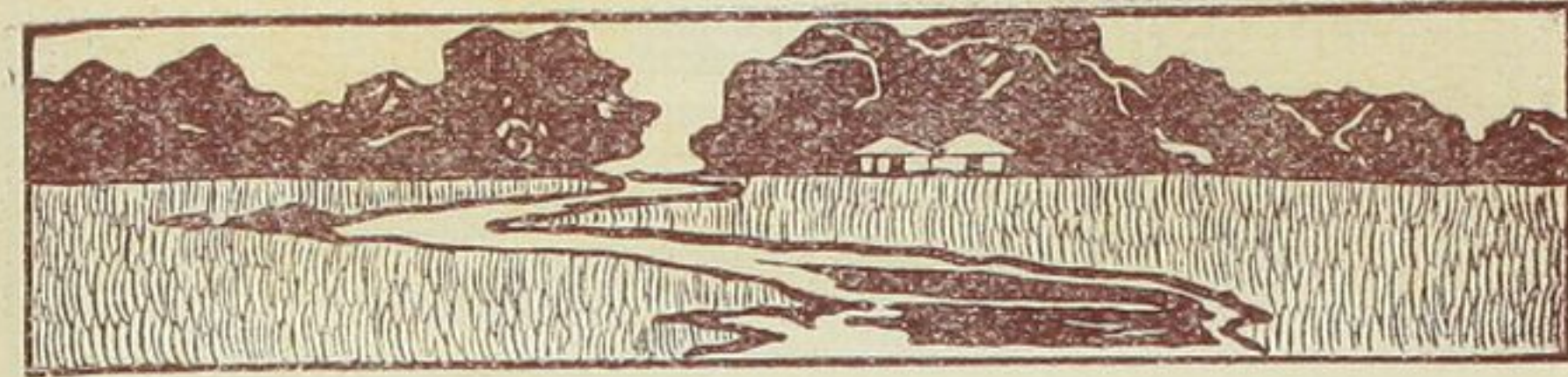
峨々たる白山、天を摩し、
夏なほ凝れる、峯の雪、
世界の初め、地の昔、
神代ながらに、解けざりき。
潔きを積める、玉の骨、
造化の斧に、削られて、
鉾先とがる、其高根、
五つに裂けて、虚を搔きて。



頂き浸たす、星の河、
銀波を崩つす、天の瀬戸、
底なき谷の、ちぎれ岩、
厓砥をなして、立つ麓。
入雲の常に、たなびけば、
峯のなかばは、包まれぬ、
群山前に、拱ねけば、
寶冠上に、輝きぬ。

(二)

山靈しきりに、我を召ひ、



弓ひき習ふ、ころひより、
高きにのぼり、一とさけび、
雲井を叱せん、心あり。

糧を包んで、跋涉し
山の高きを、よぢきはめ、
谷の深きを、かちゆきし、
そは十年と、はやならめ。

潤のはね橋、魚はねて、
峽はさの夕立、星の瀧、
梯雲かひの、尾を低れて、
檜天刺す、森の尖き。

棧道曲がる、雲の谷、
ふもとの岩は、湯瀧噴く、
浴みし下界の、汗なきに、
八月奇寒、膚をつく。

(三)

夜半を閉ざせる、霧に逢ひ、
咫尺辨せぬ、杖の跡、
岩の根木の根、踏み迷ひ、
松火翳さず、足の下。
たい真白き、谷の底、



岩にせがるゝ、瀬は遠し、
天に攀づべき、道いづこ、
寂たる満山、音もなし。
嗚く、霧の奥、
鬼神やはある、人やおる、
脊に負ふ笠を、誰れか引く、
木の枝引くか、足すべる。
先立つ人も、つゞけるも、
霧に阻たり、影見えず、
松火おぼろに、光れども、
霧のみ赤く、路分かず。



(四)
月は天心、隈もなし、
霧の上へ半ば、身を抜きて、
首を矯ぐれば、空青し、
星影潔く、きらめきて。
首を俛せば、腰の下、
真綿を飛ばす、霧の海、
松火浮ぶ、下の方、
攀ち来る者の、音すのな。
我れ、快哉と、大呼せば、



星宿乍まち、震動す、
つゝきし人を、顧みば、
もやより頭、ぬきいだす。

四面眞つ白の、天の原、
上に我れ立つ、我れ神か。
月腋ばさみ、和田のはら、
星の筏を、泛べんか。

(五)

曉天星の、かけ冴えて、
北斗かゝる、我肱、
蠶衣の裳に、明け初めて、

銀河に撥く、星の沙。

萬里の天麟、颯到し、
我れ今吹いて、飛ばされん、
落葉松生ふる、路危やし、
葉は鳴り石は、碎けなん。

旭のぼらめ、月うせぬ。
一直線に、躋り行く、
絶頂纏ふ、雲の衣、
ちゝれに切れて、面を突く。

礪石の石の、下に倚り、



東の方に、目を轉ず、
飛彈より雲は、巻き上ほり、
絶頂揺りて、吹き已まらず。

(六)

天雞啼ける、星の宿、
金雞底つ、世に叫ぶ、
濃黒包む、天の門、
滂々の雲、風を帶ぶ。
三十六の、大とびら、
大旗小旗は、紛として、
鶯の羽亂る、日の籠、



箭はまだつがず、弓かけて。

八大車輪の、舞ふ如く、
雲はますく、吹きまくり、
かせの勢ひ、いやつよく、
山も崩れと、狂ふめり。

黄金かゝやく、日の車、
しづかに廻ぐり、のぼりきぬ。
雲の魔神と、風の駒、
光りの弓に、鎮まりぬ。

(七)



混沌として、秩序なき、
錯亂兩つに、剖判す、
空紺色の、闇を解き、
水色黄に、變色す。

卵黄赤く、照耀し、
紅梅光る、亂れ絲、
四方上下も、分かざりし、
闇黑白む、我が麓。

灰色淡く、薄らぎて、
ちぎれし雲を、練りし色、
白無垢綸子を、織り成して

雪より淨き、玉蓆。

下界を包み、平らけく、
銀毛氈を、敷きつめり、
下は眞白く、上赤く、
日は曙を、開きけり。

(八)

昔磐古の、鑿をもて、
刻みし石の、痕ぞ古る。
天の磐戸に、倚り立ちて、
我れ嘘うそすれば、雲となる。



吟ず大風、起る歌、
天に反響の、音近く、
我が立つ前の、日の姿、
金の鑑を、とぎ磨く。
人間吹きし、ことのなき、
天風拂ふ、我が袂、
髪くしけづる、雲の尖、
誰れ搔き鳴らす、天の琴。
妙なる曲を、奏すらめ、
神の影して、ひるがへり、
羽衣霓裳の、舞ひ乙女、



雲井の扇翳すめり。

(九)

天球圓く、我を巻き、
 絶頂の下、二三尺、
 麓は雲の、翳を敷き、
 天の浮橋、空に浮く。

雪固まれる、玉の齧、
 氷りし岩をば、甲となし、
 雲に半ばの、身を沈め、
 氷の浮島、うく白し。

TO THE EVENING STAR.

Star that bringst home the bee,
 And sett'st the weary labourer free!
 If any star shed peace, 'tis Thou
 That send'st it from above,
 Appearing when Heaven's breath and brow
 Are sweet as hers we love.

Come to the luxuriant skies,
 Whilst the landscape's odours rise,
 Whilst far-off lowing herds are heard
 And songs when toil is done,
 From cottages whose smoke unstir'd
 curls yellow in the sun.

Star of love's soft interviews,
 Parted lovers on thee muse;
 Their remembrancer in Heaven
 of thrilling vows thou art,
 Too delicious to be riven
 By absence from the heart.

— T. Campbell. —



仙鳥に踏んで、行くべしや、
天つもろ神、つまります、
出雲八重垣、めぐる宮、
行いて掲げん、虹の御簾。

日の輝ける、石の背、
瑪瑙の如き、光りあり、
采つて飾りと、なさはやな、
あな美しくしの、珠飾り。

(十)

兀たる劍の、山よぢん、
其切つ先きを、射る日影、

今やあら礪に、とがれけん、
薙がれば落ちん、我が眉毛。

太櫛飾る、珊瑚樹、
瓔珞かゝる、鏝の上、
寶の光り、透き湛ゆ、
神ます殿の、其側へ。

春夏秋、を一にして、
むら草花は、咲きしきる、
千種斑らに、染め分けて、
黒百合疎ら、編み綴づる。



此花むしろ、此つるぎ、
そを敷き之を佩ばまほし、
むしろ巻かれず、風ゆるぎ、
劍は佩かれず、あな高し。

(十一)

大古このかた、積みし雪、
峯の裂け目に、凝結す、
雪解の水は、底にせき、
千歳谷に、合流す。

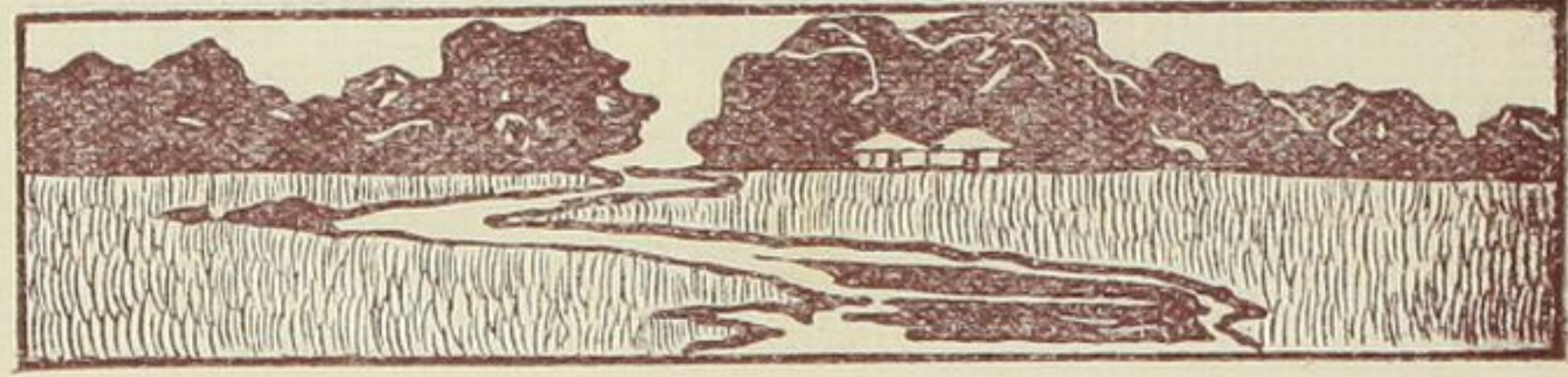
鳴神撃つか、戦ふか、
奈落もくだけ、補陀落や、

地軸を瀧の、劈くか、
底つ岩根も、つらぬけや。

千仞瀑は、落下して、
水晶ちりばむ、玉すだれ、
天池の水を、傾瀉して、
雲切れくゞに、見え隠れ。

半ばの下は、水氣立ち、
吹き巻れたる、亂れ雲、
白きみづしの、住める潭、
千蛇が池は、いづこかも。





(十二)

無限の宇宙、神秘あり、
自然の鑰を、手に啓く、
造化の幻戯、異大なり、
魔術を知れや、須らく。

眇たる五尺の、身を見るに、
蒼海浮ける、粟なりき、
こゝに我れ立ち、聖なるに、
地にこそ匍ひし、無智なりき。

雷鳥岩に、羽根ばたき、

脚下に天の、鼓うつ、
日は午に近し、ひるの月、
下方は雲の、峯ぞ立つ。

衣を振ふ、青嵐、
我れ風に駕し、飛び下る。
浴みの湯涌く、室の石、
玉の音して、骨は鳴る。

二十年前、第四高等中學、白山に修學旅行をなせり、今の新潟知縣、柏田天颯、時の祭酒なりき。隨ふ者、諸生八十餘人。頃者天颯に、内務の官衙に逢ふ。頭髮斑にして、意氣尙ほ壯、歸來此篇を誦し、懷舊の情、自ら禁する能はず。





怒濤の岩〔押韻〕

北陸寒し、春くれど、
千鳥叫んで、海荒らみ、
里のおくみに、雪あれど、
立てり磯より、八重がすみ。
能登のはじなる、荒浪は、
山に逼まりて、吼ゆるにぞ、
汐の勢ひ、石の皺、
水の幻技を、観るべきぞ。



鳳^{トビ}至^し半島、八潮湧き、
ちいれし岩の、罅裂し、
沖に突き出す、三つの崎、
浪衝く角や、驚すみし。
緑^{キナンド}碕^{サキ}に、佐渡を見ば、
青の一髪、相對す。
我れ燈臺に、喝すれば、
金北山は、動搖す。
山伏山の、裾きれて、
駝鳥の如き、首ねぢり、
波を睨んで、蹠^{ツツ}だちて、



千里ぞ駈けん、形あり。

三つある岬、中に立つ、

鹿島の岬、人知らず、

内空にして、甕なしつ、

脊なに道なく、猿も来ず。

春鹽辛く、風は巻き、

きりさめ吹ける、笠のうら、

沙噛む浪は、泡を吐き、

くも搔きみだる、海の空。

我れ緑礪を、あとにして、

磯をつたへば、道つきぬ。

曲れる阪路、反り折れて、

鹿島岬の岩立ちぬ。

岩の裂け目に、身をこゝめ、

鬼の岩屋に、来し如く、

進むに悸ちて、目を側ばめ、

岩洞を見れば、内開く。

石の割れ目は、幅二尺、

其底みれば、淵なせり。

せき込む汐の、藍深く、

唐輪違へて、くだけり。





岩によぢりて、下瞰せば、
下くつろげて、うつろなす、
岩根つきくる、浪うてば、
勢ひこんで、逆上す。

汐跳ね足を、襲ひ撃つ、
岩によぢりて、そを避けぬ。
裳しほりて、岩に立つ、
倒さに飛沫、たばしりぬ。

鱗の脊うくか、願黒く、
怪物前に、ひさまづき、

全身きざまれ、鱗は裂く、
悸き見れば、岩なりき。

森たる亂礁、林立し、
奇を争へる、岩の脈、
我か立つ厓は、空に駕し、
翼擴げて、そを抱く。

鮫皮鐮れる、屏風石、
沖に連なり、波に立つ。
高き低きが、重疊し。
背は鋸の、齒をなしつ。



幾千年を、哮えし浪、
岩は咬れて、髓出てぬ。
汐はひたして、色を染み、
筋立つ鐵の、如くしぬ。

天を蹴立て、岳崩づし、
とゞろく浪は、逆卷けり。
屏風の岩を、沖に越し、
凡てを越して、押し寄せり。

大浪越せし、汐の雪、
骨立つ岩に、花を噴く。
絹目を崩づす、亂れ瀧、

無数の絲を、胸に掛く。

荒波越せる、次ぎの岩、
其あと汐の、さばしりて、
岩に無数の、瀧の川、
そがひに銀絲、劈きて。

次ぎの岩の上、掛かる瀧、
玉の緒亂る、石の皮、
先きの岩はや、汐は盡き、
波間に抜ける、裸か岩。

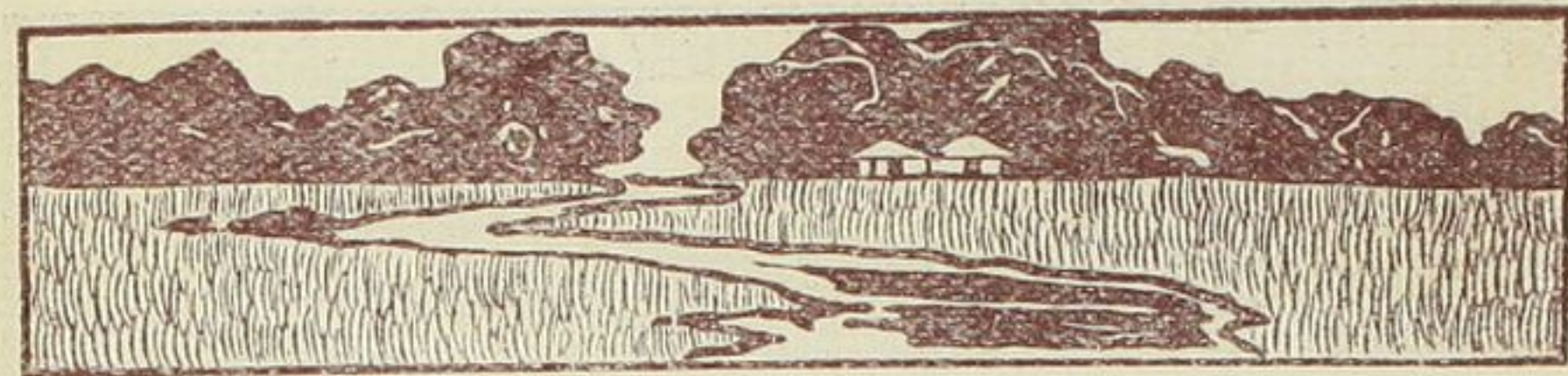
荒浪厓に、寄する時、



沖の屏風は、鳴號し、
なほ絲搖ぐ、銀の瀑、
小岩は沈んで、影もなし。
逆上したる、浪の勢、
我が足もとの、みなげむり、
厓に泡飛ぶ、銀の灰、
下白たきを、掛くるなり。
寄せては返へし、どよみきつ、
又寄せきたる、浪はやし。
一山崩づれ、又一つ、
續いて、倒る、山、凄、こし。



我れ立つ岩の、窪む穴、
汐を留めて、引き去るや、
大浪はやく、岩の脊、
沖に越し來る、面白ろや。
轟立十丈、海に抜く、
左手の屏風、絲掛けて、
浪越す跡の、空に浮く、
水晶簾を、搖り下げて。
白絲凡帳、玉すだれ、
現はれ消ゆる、岩の色、



白しと見しぞ、夢幻なれ、
いづれや岩の、眞の色。
鼓を歛さめ、去りし後、
大軍引きし、あとしはし、
鳴神狂ふ、洞の口、
汐を叱して、浪白し。

岩又岩の、浪を驅り、
大輪の渦は、舞ひ廻ぐる。
「マルス」の神の、手の猛けり、
逆鋒舞はす、しのばゆる。

我れ倚り盡くす、石の瘤、
松嘯きて、相語る、
奇譎を、濤ぞ弄ぶ、
魔法の變化、茲に觀る。

客鐵鎧を、提げて、
苔むす岩を、一撃す。
稻妻水に、閃きて、
海神爲めに、震愕す。

雲低れ天に、日影なく、
潭に浪引く、何物か、
銀の延の細長く、



窟におろち、匿るゝか。

客厓よぢて、森に入る、
鐵鎚うなり、先だちぬ。
つゞいて、蔦を、ひき上ぼる、
石に鶺鴒、とび鳴きぬ。

〔犬吠崎の浪、男鹿半島の海、人よく其名を知れど、能州の
奥鹿島岬なる、荒浪の大觀は、世に知る人稀れなれば、
そを彰はさん爲めに此歌を作る。同游の友、大田菊洲、病
を抱いて、今小笠原島に在り、歌成つて友を思ふの情殊
に切なり。〕



越の立山〔押韻〕

藤の葛を、編みし橋、
清瀧つ川、瀬にむせぶ。
蘆倉里の、あさ煙、
櫛の森に、ましら呼ぶ。

檜は高く、雲突きて、
谷ふかければ、天を見ず。
菟絲子の、匍へる厓、
閑古鳥啼き、路分かず。



身を露あらはせば、山開く。
天瓢倒さに、水注ぎ、
織女の梭に、縑を織り、
三萬丈の、絲を練る、
白絲瀧は、これなめり。
上は千曲の、瀬をくねり、
たぎりし水の、溢れ落つ。
大瀧かゝる、谷の底、
音もさやかに、雲ぞたつ。
御神樂笠の、杉の奥、



眉毛の前に、手を立てし、
崎嶇たる阪路、山の土塀、
喘ぎてよづる、七曲り、
鼻先き掠む、岩の壁。
柱は縦たてに、棟むねよこに、
極たぎも桁げたも、切りし石、
石材積める、鬼の城、
崩れし跡の、森暗し。
底つ根知らぬ、谷ふかみ、
いかづち狂ふ、音ぞ聞く、
熊笹分くる、崖の掌、



鷓鴣なく、聲近し。
下天は靄の、みだれ合ひ、
乍ち瀧の、形なし。

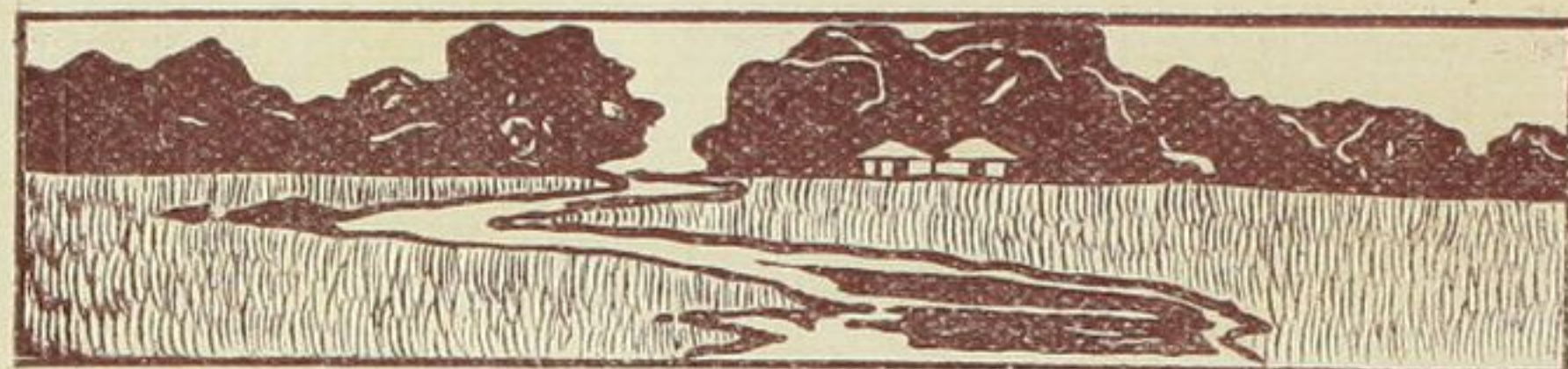
靄つらぬきて、森を出で、
夏野を見れば、隈もなし。
掠め頬にとぶ、ちぎれもや、
怪しき臭ひ、喉からし。

見渡す限り、艸茂る、
山の頂、砥の如く、
野の末かほる、萌黄色、
誰れ毛氈を、展べて敷く。

亞細亞大陸、戈壁の西、
巴密爾の野邊は、かくもがな。
千里の駒を、放たばや、
高根は白し、雪の脊。

草に迷へる、野の小路、
谷陥つて、闇に入る。
千歳を経たる、厚氷、
ふめば玉撃つ、音ぞする。

鐵の鎖は、石に鑄び、
削れる岩に、女蘿懸かる。



一つ谷越し、二つ越す、
山いや寒み、鶺鴒走る。

空海祀つる、龕古り、
獅子うづくまる、岩そびゆ。
下は千尋の谷をなし、
雪解の水音、底に吼ゆ。

茂れる林、いや深く、
日は高けれど、光なし、
柵なして、木はこみて、
鳥通ふべき、路もなし。



森うすらぎて、地は開き、
鏡の石は、苔むしつ、
芝生に腐る、溜り水、
落ち合ふ草の、路二つ。

山いや高し、石荒み、
草なく木なき、大荒野、
玉銚空を、突いて立つ、
是れ絶頂か、奥宮の。

却火に鑄りし、石焼けて、
原を流るゝ、琉璃の水、
銀珠は走り、鳴りしきり、



絶頂近く、湧いて出づ。

峯夕榮えて、日に低し、

星影涵す、谷の雪、

室堂の板戸、稱宜語る、

烏帽子射りて、日の赤き。

山高ければ、火は燃えず、

柴の落葉松、くすぶりつ、

衣かたじき、假寐する、

室堂の罫に、煙みつ。

世の炎、天を、我れ知らず、

山の寒さは、骨をつく、

夜闌けて膚に、粟生じ、

息はせまりて、咽喉かわく。

戸を排し見る、天の河、

泉の底に、星流る、

笥に口を、含嗽せば、

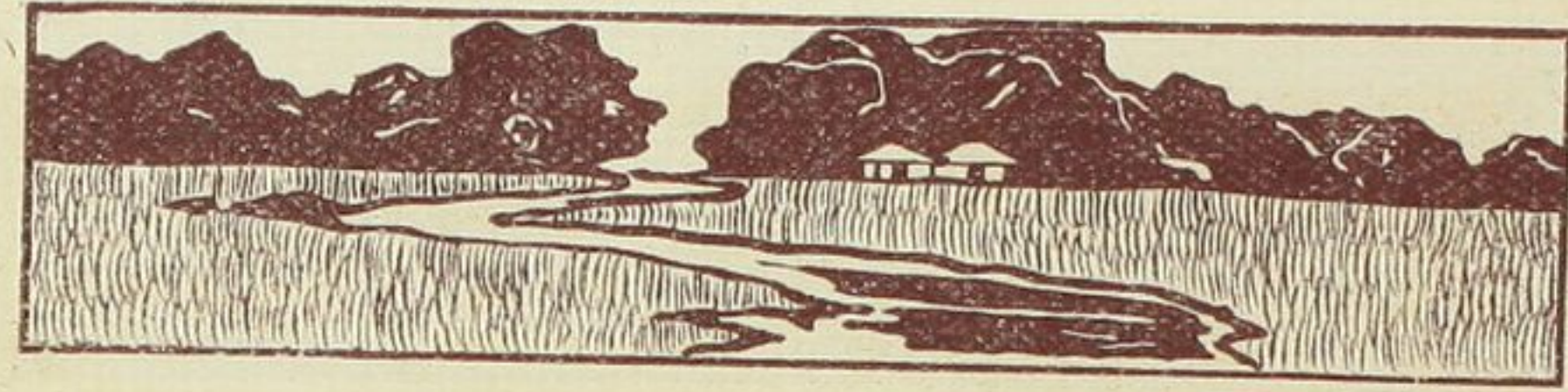
寒毛立つて、針となる。

明星近き、石枕、

夢路を揺りて、我を呼ぶ、

曉ふかく、結束す、

神も睡るか、天地寂ぶ。



石の梯、躡みのぼる、
足は虚空に、浮く軽し。
咳せば星の、愕きて、
手に天球を、握むべし。

天を隔つる、一握り、
拳をあけば、觸着す、
夜と晝とは、分け初めて、
千山の底、日を出す。

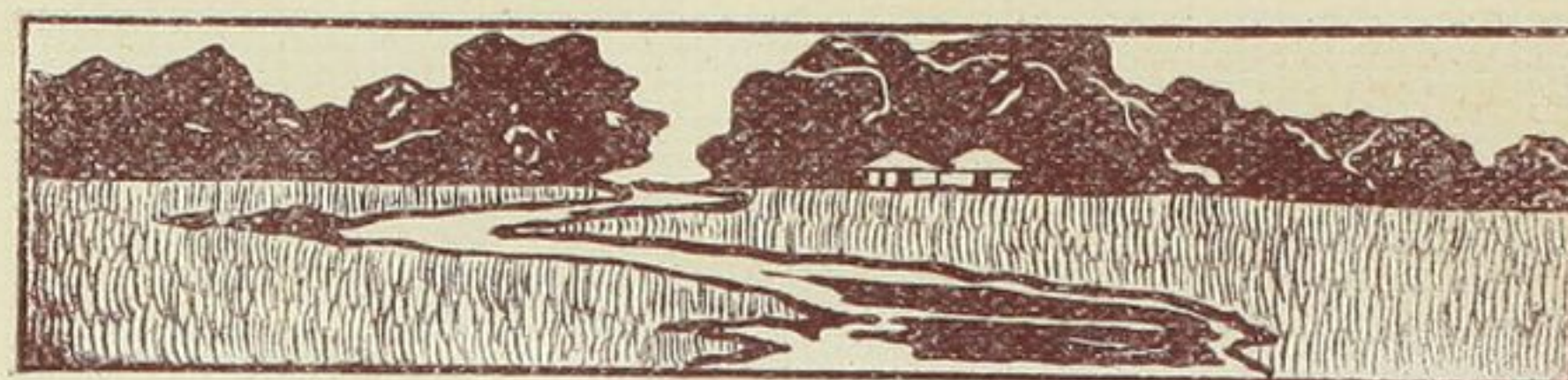
炬ごとき、火先見え、
黄金の車、はや廻ぐる、

車輪に起る、神つ風、
下より上に、吹きしきる。

天狗や爬きし、爪の創、
切りなめされし、石缺けて、
崩れんとする、上躡れば、
谷鳴動す、春として。

地を縮めたる、皺のあと、
重なる峯は、波をなし、
其頭のみ、俯し見つる、
底つ世はたゞ、青嵐。





玉蓮ぎよくれん開く、天の上、
大富士おほふじ揖まねぐ、羽衣ういの客、
紫袴むらさき裔すそ長く、
曙あけぼのの八雲を、肩に掛く。

白山南の、天に立ち、
雲の兜羅綿とろわた、雪の絹、
脚見えぬまで、引き流し、
衾ふとんにして、打ち掛けぬ。

卿きょうと我とは、鼎立す、
他は蠕虫じゆんちゆうの、匍はふ如し、
喜馬拉亞きんらあいづこ、海の外、

一瞥眼中、山はなし。

天下の山は、蟻垤あみでいのみ、
窪むは谷か、石の皮、
海は隈なし、敷くは野か、
鏡は浦か、帯は河。

木曾の御嶽、鎗が岳、
戸隠浅間、跪まき、
大小蓮華、首擡もちあげ、
蝦夷までつゞく、嶺みね青き。

銀のふと絲、山の鬩積ひだ、



積翠縫へる、信濃川、
能州半島、佐渡が島、
蔚藍湛へる、海の泡。
昔聖の、仲尼あり、
魯を泰山に、小とせり、
是れ百萬の、提封か、
見おろす底の、小庭なり。
蜻蜒洲に、抜く脊骨、
金剛草履に、履みくだく。
狭し瑞穂の、島の繪圖、
海に擴げめ、刷毛太く。



大己貴の、神の山、
天照す神、おりまさぬ、
その前の世を、こと問へど、
石物言はず、空冴えぬ。
杲々として日は、天に在り、
御劔の嶽、誰れか礪ぐ、
朱玉の光、輝きて、
金銀の氣は、雲凌ぐ。
火噴きし穴か、辰の池、
紺碧澄みて、魚すまず、



右に左に、俯して見る、
二つの鏡、波立ず。

大蛇の行きし、跡ならめ、
壘める山の、谷うぬり、
縷一線に、信濃指し、
緑の峯を、貫けり。

絶頂咫尺の、天つ日を、
背に負うて、はせ下る。
焦げし焼野の、末黒く、
池に怪しき、影うつる。

地獄の谷の、ありと聞く、
往いて悪鬼を、ひしがばや。
閻羅の王を、降服し、
神つ光を、あびせばや。

鬱金なせる、硫黄谷、
百沸湯涌く穴、數知らず、
踏鞴の口に、焰噴き、
鐵槌軋しる、音たえず。

結晶なせる、花は散り、
黄煙足下に、つき起る、
谷とろける、地の響き、



嶽も仆れん、石うなる。

日は今高し、彌陀が原、
下界の夏に、春をこめ、
佳文席しける、千種花、
唐草形の卵花染。

浄土の山に、天女あり、
綵縫へる、繩を引き、
鞦韆遊ぶ、草の風、
冠に花の、香ぞ清き。

下窺へば、雲の峯、

路絶壁に、螺なす、
雪深林の、谷を填め、
底に瀬川の、水音す。

我れ武者踏、力きみ入れ、
九十九曲の谷を、馳せ下る、
湯瀧の殿に、日は暮れて、
木免鳴くに、夢ゆる。

我幼にして、奇を好み、
たゞ溪壑の、癖深く、
江嶽湖海を、周游し、
氣を蓄へて、之を吐く。



自然は我が詩の書卷、
造化は我の良師なり、
地球に見ざる山多く、
宇宙に知らぬ秘密あり。

珊瑚の林に、孔雀飛び、
蘇鐵に吼ゆる獅子の群、
獵虎ぞ遊ぶ氷海、
南斗北斗、行かん我れ。

是れ靺鞨の、大砂漠、
我れ駒なめて、馳せ行かん、

バーベルの塔、『ピラミッド』、
ナヤガラなまの瀑、我れ行かん。

〔同游三人、山崎延吉、松平市三郎、及稻垣文次郎、今萍散、相阻絶す。俯仰十年、感極まつて、覺えず筆を投す〕

藻の花集

郊外の吟十八首

○ 苗代の繩たてよこにゆる遅くみどりの針
の葉さきうごかず

○ 夕暮を淺茅がはらの野路ゆけば一とあし



ごとくに蛙とび起つ

○ 田を鋤ける馬の背の上を夕焼けてその髪
そよぐ筑波おろしに

○ 水の田のかなた野宮のたそがれてさかさ
の影はながし川面に

○ 苜蓿^{つまごやし}あかきがうへをはぬしろき女蝶男蝶
のさしめてぞとぶ

○ なげつるべ夕日の井戸に水くめば桶に星
あり栢杓きらめく



○ でんとうゆ高かく水田のやみてらし光り
の柱立つみなぞこに

○ かへるなく石濱土手の萍を分けて漕ぐ舟
やみついでゆく

○ 森ふかみ篝の影にうつ太鼓村のまつりの
神樂なるらし

○ 瓦斯つくる大罐そらにそばだちてやみの
野の上を火ぞほとばしる



土手ながしその末ほのほむらさきの光を
ふくは瓦斯つくるらし

○ 梅若の母まよひ來し黒田津のかゝみの池
は田となりしかも

○ 野みやきて榎の夕我れたてば橋場のさと
をほとゝぎすなく

○ 鵬齋の唐うた石に鑄り置きし石濱宮は木
立かみさぶ

○ 鳥帽子の翁面着し唐衣宮のしげみをへだ

てゝぞ舞ふ

○ 森つゝき稻荷のやしろ火はくらし鳥居の
奥を禰宜のいできし

○ かしは手のもりをわたりてこだましゝ
みやの火きえて夜はまくろなり

○ 汐入の蘆はらくらき夜の江をふなうた近
く臚こぎてゆく



新體詩集
花 柘 榴 終

明治三十四年十月廿七日印刷
明治三十四年十月卅一日發行

正價金參拾五錢

※(附 奧 柘 花)※

不許複製

著者 國府種徳
發行者 大橋省吾
印刷者 佐久間衡治
印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舍第一工場

發兌元 東京市神田區仲猿樂町十六區
發賣元 東京市日本橋區本町三丁目
大賣捌 東京東京堂 大阪盛文館 名古屋川瀨代助
博文堂 博文館

武田陸軍少將題辭
多賀陸軍中尉編著

(新刊發賣)

家庭軍事談

袖珍全書
正價金三拾錢
郵稅六錢

（口繪）戰鬪之風景寫真銅版印刷挿入
我邦古來武を以て國を建つ、殊に徵兵令の布
りたる今日、兵役は國民の大義務となれ
り、軍事思想の養成は國運興隆の上於て、
實に最大急務に非ずや、本書は軍陣一切の事
に力めたる、洵に少年諸君必讀の良書なり、

笹川臨風君序 田岡嶺雲君著
佐藤秋蘋君序

下獄記

四六判形洋裝全壹冊美製本
正價金貳拾五錢郵便稅四錢

嶺雲先生矯々として世に阿らず
有言直筆し誤て法に問はれ冤を
蒙りて獄に下さる幸に無罪を以
て放たれしも平生牢騷鬱勃の氣
茲に盤屈して伸ぶるを得ず墨を
叱し筆を阿し下獄記を作る其獄
中に草する短篇長篇皆收めて此
卷にあり同情者の一讀を要す

(賣發刊新)

尾上新兵衛君著

口繪小島沖舟君畫

軍事戰塵

塵

全壹冊

袖珍美本正價金三拾錢郵稅六錢
本書は著者獨特の快筆を揮ひ、實験の
活事を編作し、讀者をして無限の興趣
を興へしむ由來國家の元氣を幼童少年
の軍事思想如何に胚胎す、今此好著を
得たる盡し少年諸君唯一の珍友を得た
るものと云ふべし。

(賣發版再正訂)

英國エム、リ、P氏原著
日本櫻井鷗村君譯

(第六版)

少年初航海

正價廿五錢
郵稅四錢

目次 家を出づ、船中の苦、メン、プレース、
檣上の亂打、海中に落つ、水夫の修業、奴隷
貿易船、脱船の密議、英國巡洋艦、黒人の王
様、和蘭の最後、頭を去く、獅子と戦ふ、荒
野に迷ふ、人間の干物、獅々の襲來、奴隷の
積込、王の怨望、鰐魚の難、軍艦の來攻、飲水の
缺乏、船火事、火藥の在處、奴隷解放、四面の大
敵、洋中に漂ふ、慘殺の言渡、危機一髪、以上

押川春浪君著

(三版)

海島冒海底軍艦

袖珍美本
正價金廿錢
郵稅六錢

全世界を舞臺とせる奇々怪々の大冒險譚は現
はれたり、本編の主人公は雄風凛々たる日本
海軍士官、其部下には剽悍決死の水兵あり、
海賊船は印更洋に張り、獅子は大陸の巖を噛み、
海賊船を舞はす處美人跳梁する處神州快男子
の鐵拳飛ぶ、紅顔の勇士あり變幻の輕艇に
乗じ、千尋の海底を駛り酒客の壯士あり奇異
の鐵車を進めて萬峯の頂を踰ゆ寂莫たる孤島
に不思議の響あり人外の異境に、大日本帝國
の軍艦旗翻る。奇絶！怪絶！又壯絶！

字佐川陸軍少將序文
田口宇吉君序文
坪谷善四郎君新著

(戰鬪寫真畫
四拾餘圖挿入)

北清觀戰記

全壹冊 正價金四拾錢郵稅六錢

東西八強國連合軍が同盟して北清の
野に戦へるは開闢以來未曾有の事變
なり、其間帝國の名譽を字内に輝か
せり、本書著者宇佐川陸軍少將田口
代議士等と共に周れく戰場を跋涉し
自ら目撃する所を直筆し且つ其實況
を寫真にし、集めて本書をなす戦地
の光影は具さに紙上に活現すまた最
も正確の材料によりて戦争の由來と
經過とを附記し全戦地の地誌をも副
へ、兼て韓國紀行を副ふ蓋し錦上の
花なり。

志賀重昂先生著

增訂拾參版

日本風景論

正價金五拾錢 郵稅拾錢

本書は審美的と學理的とを調和し、以て日本國の風景の洵美なる所因を親切に立論せしものにして、獨り日本人のみならず、外國人の批評に據るも日本近代の稀有なる名著として、普く世に知られ世に敷くこと既に五万部、版を改むると拾參版に材料と圖畫とを新に補加せり。

增訂第十版

地理學講義

正價金卅五錢 郵稅四錢

本書は東西在來の地理學講究の方法に全く別機軸を出したるものなり。日本全國の私學校にて或は教科用に或は教師用に擧りて使用するのみならず、清國、福建省の首都福州府の學校にて同國人は専ら此書を使用せり。ツヤパン、メイル記者批評して曰く地理學を講究するには眞に適當なる著述なりと亦た以て本書の眞價を知るべし。

大増補第五版

山水河及湖澤

正價金四拾錢 郵稅六錢

是れ「河と人文」との關係を立論せるもの、第四版までは河と人生、日本史、朝鮮史、支那の三大河の文學、西洋史、米國史等十三章に叙説せしも、更に河と破壞、濠州史、湖と人生等の新篇十一章を加へ、新に數多の材料を補充し、舊版よりは紙數正しく二倍となれり。

近刊印刷

山水島及半島

全一十一行 壹發一月

FAMOUS STORIES ENGLISH STORIES

BETOLD BY JAMES BALADWIN, ADAPTEE BY H. SAKURAI.

新刊發賣

當時英米の學校にては學生に授くるにリ、ダリを以て、當に歴史の類を編述したるもの、古人の逸話名家の小品文、並に其の類を編述したるもの、古人の逸話名家の小品文、用せらるる今之を移して、我邦各地の學校に於て一般に採、一古今の英雄哲人名婦の逸話四十餘編を綴りたるもの、一主として單音字を用ひ、固有名詞等には發音譜を施し、一文章は米國知名の教育家シエームス、パルドウイ、ン、氏が精練の筆に成り、實用英語を學ぶに適切なる事、及各種學校の教科書となすに頗る良好なりとす。

正價金三拾五錢 郵稅四錢

SELECTED BY MISS UME TSUDA

日九十月六年四十三治明 濟定檢省部文 版再正訂

此書は津田梅子女史が多年教授上の實驗に基き、實用英語の主旨により、歐米大家の作に成れる小話數篇を撰び、出で難句の字句には一々脚註を加へたるものなり、殊に印刷紙質は共に文部省規定に準じて鮮明良好なれば、尋常中學高等女學校等にて第四リ、ダリを程度とする學、年一期間の譯讀會話等の教科書となすに適し、學生をして歐米の俗語を知らしむるに甚た便なり、本書既に日本女子大學校、華族女學校、女子高等師範學校、明治女學校、女子語學校、女子英語塾等、其他男女數十學校の教科書として採用せられたり。

正價金三拾五錢 郵稅四錢

家 庭 唱 歌

獨逸東洋語學院講師巖谷小波君校閱
少年世界記者木村小舟君作曲
東京音樂學校講師田村虎藏君作曲

家庭唱歌 桃太郎 (第一編)

一 むかしのむかし山里に、

賤が伏屋を結びたて、

心眞に慈悲深き、

翁と姫と住ひけり。

二 翁は毎ちこたらず、

後の山に柴を刈り、

姫は前の小川にて、

衣服洗ふを常としつ。

全部拾貳冊 正價壹冊金六錢
郵稅壹冊貳錢 同四冊迄貳錢

〔全部目次〕

- 第壹編 桃太郎
- 第貳編 舌切雀
- 第參編 松山鏡
- 第四編 花咲爺
- 第五編 浦島太郎
- 第六編 文福茶釜
- 第七編 勝々山
- 第八編 羅生門
- 第九編 一寸法師
- 第十編 猿蟹合戦
- 第十一編 俵藤太
- 第十二編 瘤とり

(出版完成)